山形県埋蔵文化財調査報告書第27集

水上遺跡
発掘調査報告書

山形県教育委員会

序

本報告書は、旧山形県立新庄農業高等学校向町分校（現在県立新庄北高向町分校）のグランド造成工事に伴い、昭和51年に山形県教育委員会が主体となり、最上町教育委員会の協力を得て実施した、水上遺跡の発掘調査記録であります。

最上町には、小国川流域を中心とした数多くの縄文時代の遺跡が発見されており、本遺跡もその一つであります。調査の結果、縄文時代の中期・後期・晩期の重複した集落であることが明らかになり、多くの土器・石器とともに、力強い人々の生活の跡を伺い知ることができました。本調査の成果が、埋蔵文化財に対する理解と、今後の研究の一助となれば幸いです。

最後に、調査に参加された各位はもとより、多大の御協力と御援助を賜った最上町教育委員会の方々に対し、深甚の謝意を表します。

昭和55年３月

山形県教育委員会

教育長　吉村敏夫

例　言

1　本報告は、山形県立新庄農業高校学校向町分校（現在県立新庄北高向町分校）のグランド造成の工事に係るため、山形県教育委員会が主体となり昭和51年７月20日から９月８日まで延36日間にわたって調査が実施された発掘調査報告書である。

2　調査にあたっては、山形県土木部営繕課・最上町教育委員会並びに県立新庄農業高等学校向町分校などの諸関係機関の協力を得て調査が行なわれ、ここに記して感謝を申し上げる。

3　調査体制は下記の通りである。

調査主体　山形県教育委員会

調査担当　山形県埋蔵文化財緊急調査団

調査担当者　調査員　佐藤鎮雄　佐藤正俊　野尻　侃　保角里志（山形県教育庁文化課）

協力員　長沢正機　（最上町立向町小学校）

上野　貞　（最上町文化財保護審議委員）

補助員　佐藤義信　（大正大学）

協力者　県立新庄農業高等学校向町分校地歴部・バトミントン部生徒

4　挿図縮尺は、遺構では$\frac{1}{2}$・$\frac{1}{3}$とし、遺物は土器実測で$\frac{1}{2}$・$\frac{1}{3}$を原則とし、拓影図は$\frac{1}{3}$とし、石器実測図は打製石器で$\frac{1}{2}$・磨製石器で$\frac{1}{4}$とし、それぞれにスケールを示した。挿図中の記号は、ＳＴ－住居跡・ＥＬ－炉跡・ＥＰ－柱穴・ＳＫ－土坑とし、住居跡・炉跡・土坑は全体にそれぞれ一連番号を付け、柱穴などは各挿図毎一連の数字で示した。

5　本報告書の作成は、佐藤正俊・佐藤義信・大類　誠が中心に執筆し、挿図・図版作成にあたっては太田八重子・津留房子・鈴木久子・木村陽子・高橋貴恵子・黒金佳子が補助した。本書の編集は名和達朗が担当し、全体については佐々木洋治が、総括した。

目　　次

Ⅰ　調査の経緯

1　調査に至る経過 …… 1

2　調査の経過 …… 1

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1　立地と環境 …… 2

2　周辺の遺跡 …… 2

Ⅲ　遺跡の概要

1　遺跡の層序 …… 4

2　遺構の概略 …… 4

3　遺物の出土状況 …… 4

Ⅳ　遺構と遺物

1　遺　　構 …… 6

（1）住居跡 …… 6

（2）土　坑 …… 12

2　遺　　物 …… 14

（1）土器の分類 …… 14

a 土器片の分類 …… 14

b 土 製 品 …… 20

c 完形土器 …… 21

（2）石器からの分類 …… 27

Ⅴ　総　　括

1　遺構について …… 34

2　遺物について …… 34

挿図目次

第1図　遺跡位置・分布図

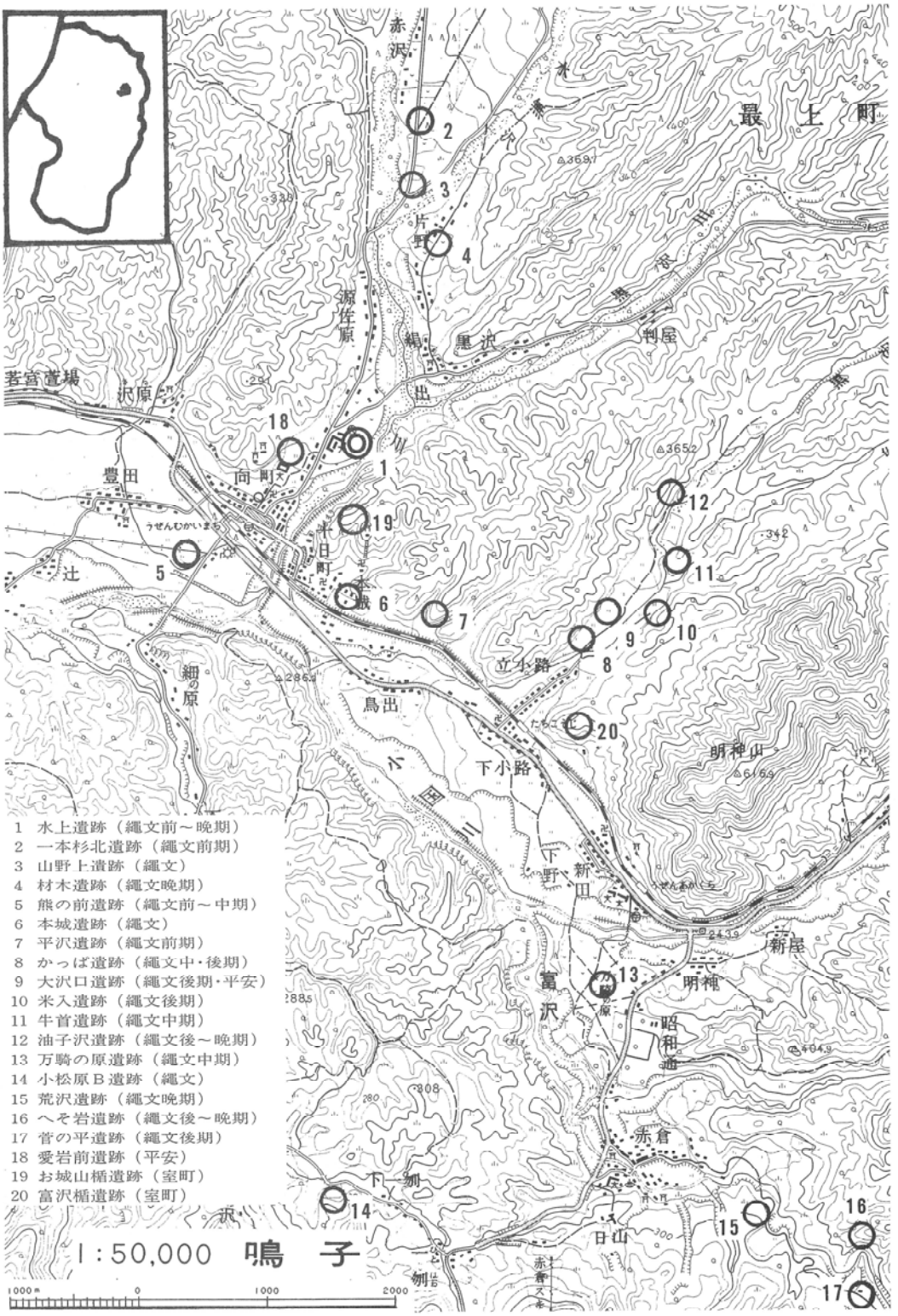
第2図　遺跡全体図 …… 3

第3図　遺構配置図 …… 5

第４図　２・３号住居跡 …… 7
第５図　４号住居跡・１号土坑 …… 9
第６図　５・６号住居跡 …… 13
第７図　２・３号住居跡出土土器 …… 15
第８図　４・５・６号住居跡出土土器 …… 17
第９図　６号住居跡・包含層出土土器 …… 18
第10図　包含層出土土器・土製円盤 …… 19
第11図　完形土器実測図（１） …… 24
第12図　完形土器実測図（２） …… 25
第13図　土製品実測図 …… 26
第14図　打製石器実測図（１） …… 29
第15図　打製石器実測図（２） …… 31
第16図　磨製石器実測図（１） …… 32
第17図　磨製石器実測図（２） …… 33

図版目次

図版１　水上遺跡遠景　　水上遺跡近景
図版２　２・３号住居跡全景　　発掘風景
図版３　４号住居跡全景　　１号土坑全景
図版４　５・６号住居跡全景　　２号住居跡出土土器
図版５　３号住居跡出土土器　　４号住居跡出土土器
図版６　５号住居跡出土土器　　６号住居跡出土土器
図版７　包含層出土土器　　土　製　品
図版８　完形土器（１）
図版９　完形土器（２）
図版10　磨製石器　　打製石器


1 水上遺跡（縄文前～晩期）
2 一本杉北遺跡（縄文前期）
3 山野上遺跡（縄文）
4 材木遺跡（縄文晩期）
5 熊の前遺跡（縄文前～中期）
6 本城遺跡（縄文）
7 平沢遺跡（縄文前期）
8 かっぱ遺跡（縄文中・後期）
9 大沢口遺跡（縄文後期・平安）
10 米入遺跡（縄文後期）
11 牛首遺跡（縄文中期）
12 油子沢遺跡（縄文後～晩期）
13 万騎の原遺跡（縄文中期）
14 小松原Ｂ遺跡（縄文）
15 荒沢遺跡（縄文晩期）
16 へそ岩遺跡（縄文後～晩期）
17 菅の平遺跡（縄文後期）
18 愛岩前遺跡（平安）
19 お城山楯遺跡（室町）
20 富沢楯遺跡（室町）
1：50,000 鳴子
最上町
赤沢
源作原
黒沢
判屋
若宮道場
沢原
豊田
向町
辻
細の原
鳥出
立小路
下小路
明神山
下野新田
富沢
新屋
明神
昭和通
赤倉
日山
下沖
1000m 0 1000 2000

第１図　遺跡位置・分布図

Ⅰ　調査の経緯

1　調査に至る経過

水上遺跡は、山形県最上郡最上町向町字水上に所在する。最上町には数多くの遺跡があり、「山形県遺跡地図」（昭和53年３月・山形県教育委員会編）によれば41ヶ所の遺跡が明記されており、小国川とその支流域である河岸段丘上に立地しており、先土器時代から鎌倉・室町時代にかけての遺跡が群在し確認され、本遺跡の周辺部には縄文時代前期から後・晩期の遺跡が６ヶ所ほど在る。本遺跡は、縄文時代前期末葉から晩期中葉までの集落跡となっている。

昭和50年に新庄農業高等学校向町分校グランド造成計画が策定したため、県土本部営繕課・県教委総務課と文化課の協議がなされ、その結果昭和51年７月より緊急発掘調査が実施され、調査は造成削平される地域を中心に行なわれ、とくに縄文時代晩期の遺物が分布する地区は河岸段丘の中段に在り、調査区の中心部より一段低いため埋め立ての現状保存とすることにした。（第２図）

2　調査の経過

調査区は、遺跡の中心地より南東側に位置し東西90ｍ・南北120ｍの範囲で行なわれ、２×２ｍを一単位とするグリッドを設定しＸ軸を東西・Ｙ軸を南北とし、Ｙ軸方向はＮ－26°－Ｅを計り、トレンチ法を並用して調査を実施した。調査経過の概略は下記の通りである。

７月20日～24日　最上町教育委員会の協力を得て草刈・グリッド設定作業を行なう。長沢正機氏の指導により調査区全域にわたって遺物の分布状況を把握するため10ｍごとにグリッド掘りの作業を実施する。

７月26日～31日　調査区の北側を中心にＸ軸方向のトレンチによる粗掘作業。遺物は30～35－９～14Ｇにかけて多く出土し拡張を行ない７号住居跡を確認する。

８月２日～７日　調査の主体を南側の地区に移し、Ｘ・Ｙ軸方向のトレンチによる粗掘・遺構検出作業・35－40～55、30～35－46Ｇにおいて縄文晩期の住居跡５軒を確認する。

８月９日～12日　前の週６日より11日まで雨が降り続き遺物洗浄などの室内作業。２～16号住居跡・土坑などの遺構を確認。縄文後期の遺物の出土が多くみられる。

８月17日～31日　１～６号住居跡・土拡などの検出及び床面・壁・柱穴などの精査追究。下旬の５日間はまたしも雨が降り続き、調査の進行が難行する。

９月１日～８日　住居跡の精査追究・測図・写真撮影を行ない８日間の調査を終了する。

II　遺跡の立地と環境

1　立地と環境

向町盆地には、比高80～100ｍの低平な丘陵が点在し、その周囲はかなり急峻な山地に続き、一見して山間盆地であることが判かる。向町盆地は東西が約7.5km・南北が約５kmの山間盆地で、奥羽山系の神室連峰に源を発する最上小国川が盆地の南縁を西に流れて最上川と合流している。水上遺跡は、西流する小国川の支流絹出川の河岸段丘上の上段と中段に立地し、清水沢川と黒沢川が合流して絹出川となり、合流点より下流500ｍの右岸に位置し、標高210ｍから215ｍを測る。

本遺跡は、絹出川が大きく蛇行し段丘が張り出す微高地に遺跡があり、北東側から南西側にかけて緩やかな傾斜となっており、今回の調査区域は遺跡の中央寄りから南西側にかけてと、段丘中段の地区一帯である。現在は荒地となっているが、以前は新庄農業高等学校向町分校の畑地や一部水田となっている。

2　周辺の遺跡

この周辺地域の遺跡は、向町盆地の南縁を流れる小国川とその支流である絹出川や白川などの段丘上に、縄文時代前期から晩期の遺跡が立地し小国川の右岸微高地上に多く密集している。最上町では41ヶ所の遺跡が発見されているが、中でも縄文時代後・晩期の遺跡が最も多く確認されている。先土器時代から縄文時代早期の遺跡は、小国川左岸の低平な丘陵地帯に立地し、月楯遺跡からは細石刃核が１点出土し、撚糸文系の土器片が２・３ヶ所の遺跡から採集されている。縄文時代前期から中期にかけては小国川右岸の段上丘の広範な微高地上の南斜面部に立地し、熊の前・水木田（註１）・万騎の原（註２）遺跡など比較的大規模な集落跡が構成されたと推察される。縄文時代後・晩期にかけての遺跡は小国川右岸の広範な地帯にも立地するが、その支流域である絹出川・鳥出川・明神川などの段丘上にやや小規模な範囲で位置し、遺跡自体が小国川の支流域に広がりをみせており、昭和48年に調査がなされた材木遺跡などが知られ、晩期大洞Ｃ１からA′式期の集落跡である。

弥生時代の遺跡はその発見例が知られておらず、歴史時代の遺跡は愛宕前遺跡など２ヶ所確認されている。鎌倉時代末から室町時代にかけて小国川の両岸の丘陵地帯には、通称「最上四八楯」といわれるほど館跡が群在している。（第１図）

（註１）昭和52年・53年に両遺跡とも県教委文化課でほ場整備に係る緊急発掘調査を実施している。

（註２）名和達朗他　「最上町分布講査報告」　『さあべい』　第２巻　第３号　1976

N
5
10
15
20
25
30
35
40
45(X)
5
10
15
20
25
30
35
40
45
50
55
60
65
(Y)
旧新庄農高
向町分校
向町小学校グランド
0
25m

第2図　遺跡全体図

III　遺跡の概要

1　遺跡の層序

遺跡は段丘上の微高地に位置し北東側から南西側へと全体的に傾斜し、また東側へと緩るかに傾斜し、段丘の中段ではほぼ水平の状態になっている。

Ⅰ層　黒色土　　耕作土で下部に酸化鉄が紐状になって堆積している。厚さ10～25cm。

Ⅱ層　黒褐色土　若干の粘土質で微量の炭化粒子を含み固い。厚さ５～15cm。

Ⅲ層　暗褐色土　色調は赤褐色に近く、炭化・風化礫粒を含み粘性があり微砂質で軟かい。厚さ20～25cm、後・晩期の遺物を含んでいる。

Ⅳ層　暗褐色土　Ⅲ層より色調が明るく多量の炭化粒子を含み粘質に富み固くなっている。厚さ５～25cm　中期の遺物を含んでいる。

Ⅴ層　黄褐色土　粘質微砂質土で地山である。

各層の堆積状態は、調査区の北側では攪乱のため遺物包含層はみられず、中央部から南側にかけ良好な堆積状態を示し、全体的にやや急な傾斜となっている。

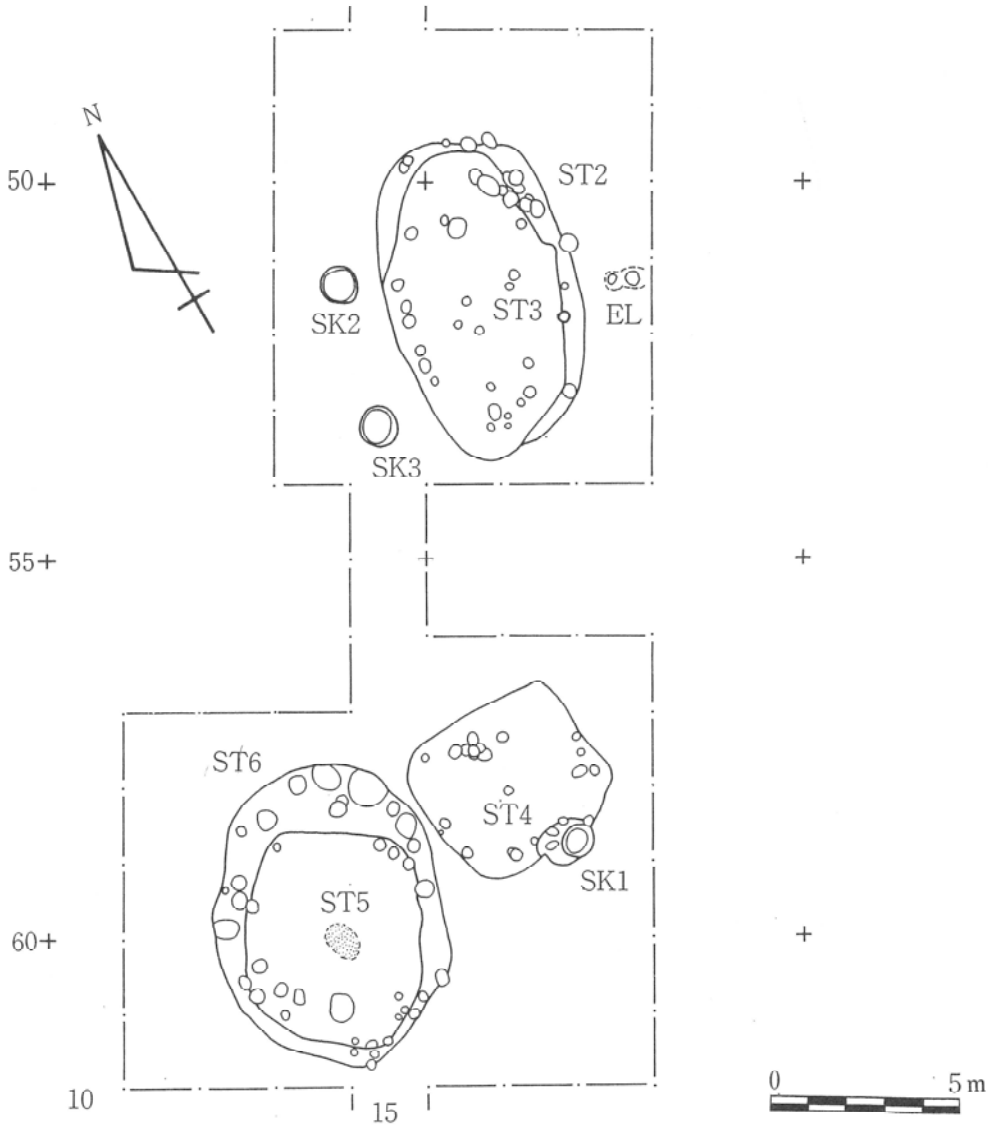
2　遺構の概略

今回の調査で検出した遺構は、住居跡13軒（検出６・炉跡のみ１・確認６）・土坑３基である。遺構は、調査区の段丘上段では北東側と南西側の傾斜地にあり、中段では35－45グリッドを中心に縄文時代晩期の住居跡を確認し、いずれも円形を呈し径５～７ｍで重複している。確認面は、第Ⅲ・Ⅳ層にかけて認められ、検出した遺構は第Ⅳ層黄褐色土を掘り込んで造られている。（第２・３図）

調査区の北西側から中央にかけては、まったく遺構が検出されず遺物もほとんど出土しない。

3　遺物の出土状況

遺物の出土状況は、縄文時代中期の土器は30－35－９－14グリッドにおい最も多く出土し、縄文時代後期の土器は２～６号住居跡で多くみられ全体的に散布している。縄文時代晩期の土器は、35－40－55グリッド・31－40－45グリッドに最も多く出土している。住居跡内での遺物の出土は、覆土中層の住居跡の中央部寄りに多くみられ、石器などと共に廃棄された現象もみられ、かなり縄文時代中期の土器なども混入され、床面直上での遺物の出土は余りみられない。



第3図　遺構配置図

Ⅳ　遺構と遺物

1　遺　　構

（1）住　居　跡

1号住居跡

調査区の北東側の傾斜地、31～34－10～13グリッド内に位置している。この地区は非常に撹乱が著しく第Ⅴ層上面までたっしており、柱穴と周溝の一部が確認され検出したものである。

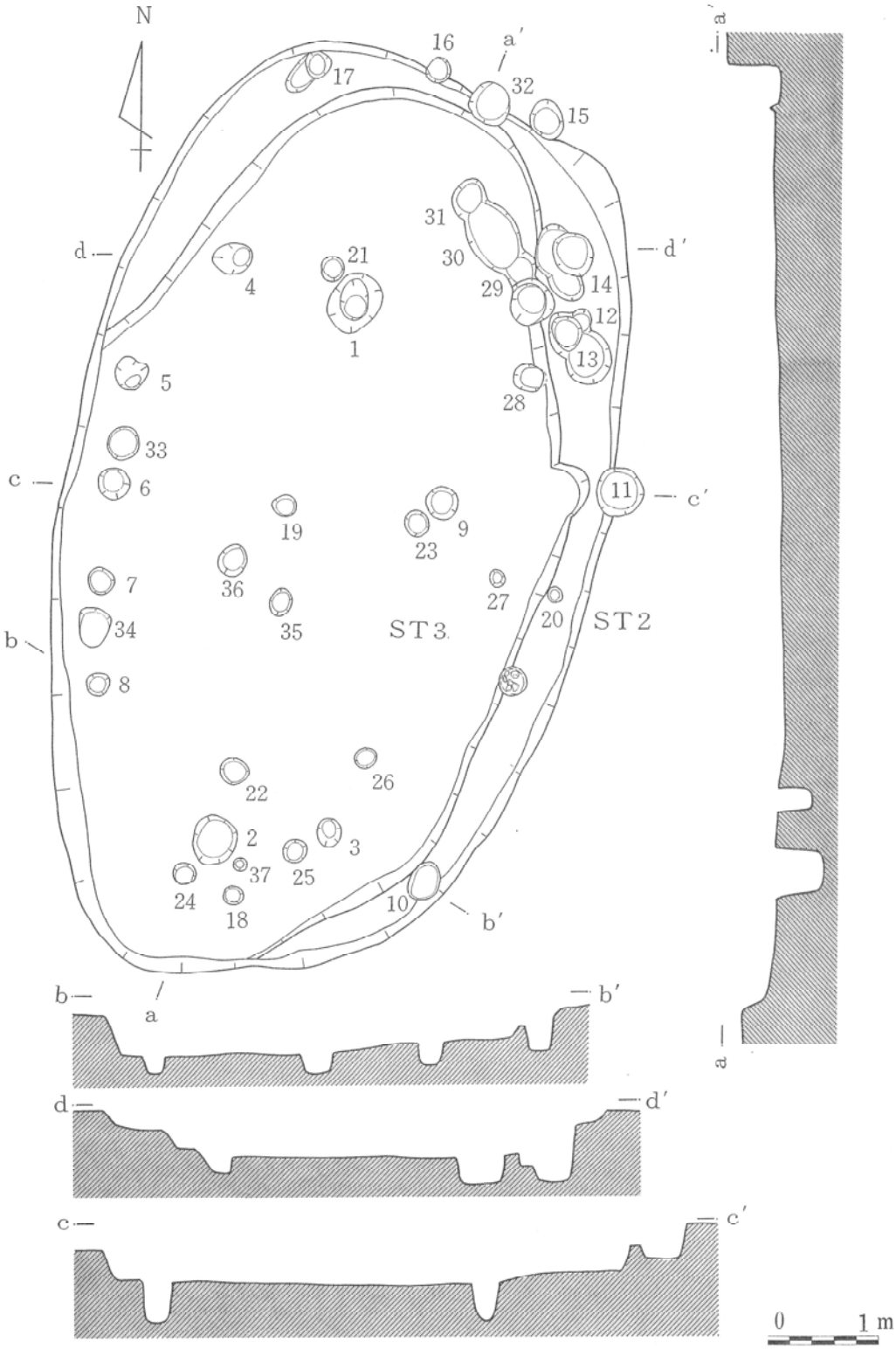
平面形は不明であるが、柱穴の配列状態を考えると円形を呈していると思われる。周溝は西側で確認され幅10～12cm・深さ５cmで、柱穴は７本検出され周溝付近で支柱穴２本、住居跡の中央部で弧をなすように４本配列され主柱穴と考えられ、北東側で１本支柱穴が検出されている。床面および炉跡は確認されていない。出土遺物は、柱穴の中より縄文時代中期の大木９ｂ式の土器片が７点出土している。

時期は、柱穴から出土した土器片からみて、縄文時代中期大木９ｂ式期に相当すると考えられる。

2・3号住居跡　（第４・７図　図版２・４）

両住居跡とも調査区の南西側の傾斜地、14～18－50～54グリッド内に位置している。西側と南西側に２・３号土坑が隣接している。確認面は２号住居跡で第Ⅲ層下部で確認され第Ⅴ層の上面を若干掘り込んで造られ、３号住居跡は２号住居跡の床面と柱穴を精査している際２～３cm下部に検出された。両住居跡とも南側で若干撹乱されているが、ほぼ良好である。

2号住居跡　平面形は、東側と西側が胴張りの長楕円形を呈している。規模は長軸8.44ｍ・短軸4.90ｍで確認面からの深さは約18cmで、長軸方向はＮ－17°－Ｅを計る。壁は全体に緩やかに掘り込まれておりやや軟弱である。床面は中央部が暗黒褐色土で固く踏みしめられている他は、壁に近づくにつれて軟弱で、中央部がやや凹凸がありその他は平担である。柱穴は19本確認され、主柱穴は２本でＥＰ１・２、径42～52cm、深さ32～43cmになり北東・南西側寄りに位置しほぼ垂直に掘り込まれている。支柱穴は12本でＥＰ３・５～９・13～14・19で径20～40cm・深さ15～36cmになり、西側・北東側・南側に集約されており、とくに西側では約２ｍの間隔で直線的に配置されている。壁柱穴は５本検出されＥＰ10・11・15～17で径35～40cm・深さ26～32cmで北壁と東壁中央部と南壁に在り、やや傾斜


N
a
a′
16
17
32
15
31
30
29
14
12
13
28
d
d′
4
21
1
5
33
6
c
c′
11
19
9
23
36
7
34
35
ST3
27
20
ST2
b
8
22
26
2
3
37
25
24
18
10
b′
b
a
b′
d
d′
c
c′
0
1 m

第4図　2・3号住居跡

をもって掘り込んでいる。周溝は検出されていない。炉跡はＥＰ19と22の間で径15cmの範囲で微量に焼土粒子が検出されただけで、炉跡として判断することは不明確である。

覆土は大きく分けて６層に区分され、１層は黒褐色土で炭化粒子を含み軟らかく、２層は暗褐色土で炭化・黄褐色土粒子を含み粘性があり、３層は黒褐色土で炭化粒子・黄褐色土ブロックを含み粘質微砂で堅くしまり、４層は褐色土で粘質があり軟らかく、５層は暗褐色土で２層より色調は暗く、多量の炭化・焼土粒子を含み軟らかく、６層は褐色土で黄褐色土粒子を多く含み軟かい。堆積の状態は、北側より流れ込むように南側が厚くレンズ状に堆積している。

出土遺物は、整理箱にして７箱出土しておりその大半が覆土５から６層の下層から縄文時代後期の土器片に混って中期の大木９ｂ式が出土している。5層下部から床面にかけて石鏃2・石錐１・石匙２・篦状石器１・磨石１・凹石・１有孔石製品１が出土している。

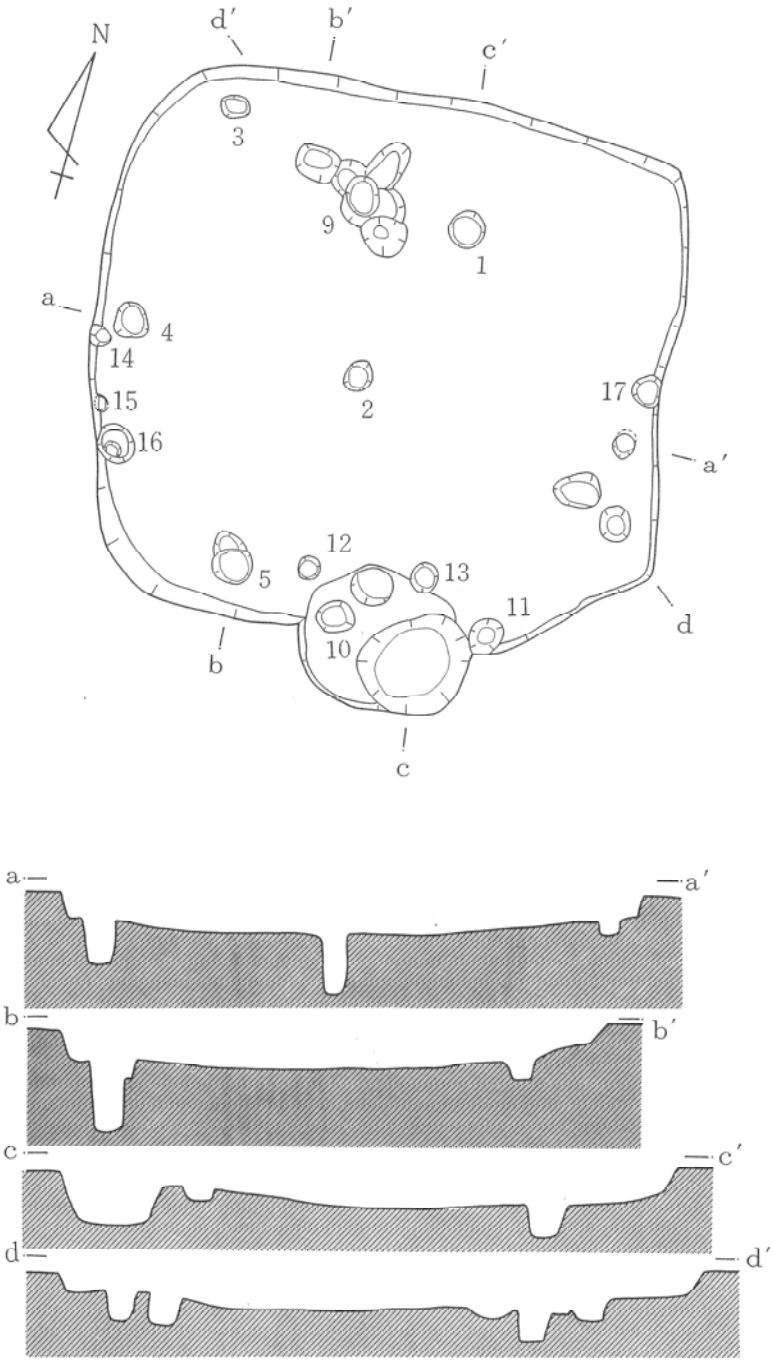
３号住居跡　平面形は、南西側から南側にかけて不明であるがほぼ２号住居跡の床面で長楕円形を示している。規模は推定長径4.30ｍ・短径4.50ｍで２号住居跡の床面からの深さは20～25cmである。壁は全体的に緩やかに掘り込まれており、固く踏みしめられている状態である。壁溝は検出されなかった。柱穴は17本検出され、主柱穴は３本でＥＰ21・22・35で径22～26cm・深さ20～31cmを計り、住居跡の北側と中央部と南側寄りに位置している。支柱穴は11本でＥＰ４・23～27・30・31・33・34・36・径12～24cm・深さ20～31cmである。壁柱穴は３本でＥＰ28・29・32でいずれも北東側壁に位置している。床面は住居跡の中央部がやや窪み凹凸があり軟弱である。炉跡は確認されなかった。

覆土は大別して４層に分けられ、１層は暗褐色土で黄褐色土ブロックが多く混入され固く踏みしめられ、２号住居跡の床面を構成している。２層は黒褐色土で炭化・焼土粒子を含み粘質があり堅くなっており、３層は褐色土で炭化粒子を含みやや砂質性があり、４層は暗黄褐色土で多量の炭化粒子が含まれ軟らかくなっている。堆積の状態は、ほぼレンズ状に堆積している。

なおＥＰ37は、２・３号住居跡よりも新しく覆土は黒褐色土でやや堅い土質となっており、後期宮戸ＩＩａ式・晩期式大洞Ｂの土器片２点が混入されている（第７図16・26)。

２・３号住居跡の重複関係は、３号住居跡が廃棄され、ある程度埋没した後に、その上部に２号住居跡が近接した時間帯に構築されたと考えられる。新旧関係は２号住居跡が３号住居跡よりも新しいものである。

２・３号住居跡の時期は、重複関係および出土した土器からみて、いずれも縄文時代後期宮戸Ｉｂ式期の所産である。



第 5 図　4 号住居跡・1 号土坑

4号住居跡　（第5・8図　図版3・5）

調査区の南西の傾斜地、15～18－57～59グリッド内に位置している。南側では1号土坑と重複し、西側では6号住居跡と接している。確認面は第Ⅲ層下部で確認され第Ⅴ層の上面を若干掘り込んで構築されている。遺存状態はあまり良くない、特に住居跡の中央部は畑地耕作によりほとんど攪乱されている。

平面形は、東側で内側に入り込んでいるが全体に胴がややふくらみ、南側の中央部で大きく張り出す隅丸方形を呈している。規模は長軸が東西方向で4.66m、短軸が南北方向で4.34m、確認面からの深さは20～26cmで、短軸方向はN－6°－Wを計る。壁は、東側から南側の一部にかけ垂直で、北・西・南側の一部で緩やかに掘り込んでおり、全体的に固く踏みしめられている。床面は、中央部から南側の張り出し部にかけて非常に固く踏みしめられており、壁際及びその他は軟弱であり、中央部がやや窪んでいる状態で凹凸に富んでいる。柱穴は17本確認され、主柱穴は2 本でＥＰ１・２、径12～18cm、深さ31～52cmで住居跡の中央部から北寄りに位置している。支柱穴はＥＰ３～９で、径12～40cm、深28～58cmで住居跡の各コーナーと東壁と西壁付近に在る壁柱穴は4本でＥＰ14～17で径10cm～18cm、深さ12～16cmであり、とくにＥＰ17はＥＰ４との関係で支柱穴としても利用されたと考えられる。その他ＥＰ10～13は径８cm～30cm・深さ12～21cmで出入口の施設のための柱穴と考えられる。壁溝は検出されない。炉跡は、住居跡の中央部が攪乱されているため確認されなかった。

覆土は大きく分けて5層に区分されるが、攪乱を受けているため明確に判明できない。

出土遺物は、量的に少なく整理箱1箱であり、遺物のほとんどは住居跡の東側から北側の覆土下層から出土しており、(第11図001)は住居跡北東隅の床面直上より出土し、石器は石鏃1・石匙1・削器1・磨石1・凹石1・石棒片2・石皿片1などが覆土下層から出土している。

1号土坑との重複関係は、4号住居跡の床面精査の際に検出されたもので、4号住居跡が新しい。時期は、縄文時代後期宮戸Ⅲb式期の所産である。

5・6号住居跡　（第6・8図　図版4・6）

調査区の南西側の傾斜地、13～16－58～12グリッド内に位置している。北東側で4号住居と隣接している。確認面は5号住居跡で第Ⅲ層中で確認され、6号住居跡は5号住居跡の精査・検出作業をしている際に確認された。両住居跡とも南西側の一部が攪乱されているほかは遺存状態も良好である。

5号住居跡　平面形は、南側がやや大きく張り出す不整隅丸方形を呈している。規模は

長軸を北東・南西方向にとり5.22ｍ、短軸を北西・南東方向にとり4.66ｍで、確認面からの深さは約１～1.15ｍで長軸方向はＮ－30°－Ｅを計る。壁は、やや傾斜のあるように掘り込まれ、南側ではさらに傾斜が強くなっており、南側の張り出している部分で固く踏みしめられている。床面は、炉跡(ＥＬ１)の周辺部から南側壁付近にかけて凹凸があり、固く踏みしめられており、その他は軟弱で住居跡の中央部付近でやや落ち窪む状態である。壁溝は検出されない。柱穴は16本検出され、支柱・壁柱穴を利用した構造となっている。主柱穴は１本とみられＥＰ１で径約72cm・深さ45cmで壁際に傾斜して掘り込まれる。支・壁柱穴はＥＰ２～６で、径12～40cm・深さ21～34 cmを測り、とくにＥＰ５～10・13～16は壁の上部に在り、住居跡のコーナーあたりに位置している。

炉跡(ＥＬ１)は、住居跡の中央南側寄りに位置し、平面形は不整楕円形を示す地床炉である。大きさは長径1.08 cm・短径74 cmで、床面を数cm掘り込んで造られている。炉の状態は、焼土もあまり堆積しておらず、北側と西側で若干焼けただれている状態である。

覆土は大別して６層に区分される。上層から中層は１層黒褐色土で炭化粒子を含む、２層褐色土で炭化焼土粒子を含み堅い、３層暗褐色土で炭化粒子を多量に含み粘性があり軟かい。下層は４層黒褐色土で炭化粒子を含み軟らかい。５層褐色土で焼土・炭化粒子を多量に含む、６層暗黄褐色土で炭化粒子を多量に含み非常に軟らかい。堆積の状態は、全体に北東側から流入するようにレンズ状に堆積している。

出土遺物は、覆土３～５層の一部にかけて多量に出土し、縄文時代中期の土器片が多量に混っている。(第11図003)。土器は(第11図002・第12図008) は５層上面の住居跡北東側壁付近より出土し、床面直上より土偶胴部１・耳栓１・土製円盤が出土している。石器はいずれも４～５層中にかけて出土し、石錐１・石匙２・凹石１・石皿１・二次加工のある剝片３が出土している。

６号住居跡　平面は、東側・西側がやや張り出す不整楕円形を呈している。規模は長軸8.00ｍ・短軸6.32ｍで、確認面からの深さ第Ⅳ層より約12～32cmで、長軸方向はＮ－27°－Ｅを計る。壁は、緩やかに掘り込まれて造られ、東側から南西側にかけて北側と比べて壁高があり、全体に軟弱である。床面は、北側ＥＰ17の付近がやや固く踏みしめられている他は軟弱でやや凹凸がみられるものの平坦である。柱穴は21本検出され、主柱穴は５号住居跡に切られているため不明である。支柱穴は11本でＥＰ17～27、径22～60cm・深さ27～36cmで、東側を除きほぼ壁寄り付近に在りほぼ全周する。壁柱穴は10本でＥＰ28～37、径25～92cm・深さ42～102cmで、南側壁および西側から北東側壁にかけて位置し、ＥＰ28・30～32・33・36は主柱穴の役割をはたしていると推察できる。壁溝および炉跡は検出されない。

覆土は５号住居跡にその大半が壊されているため不明確であるが、大別すると４層に区分される。１層は黒褐色土で炭化・風化礫粒を含みやや堅い、２層は暗褐色土で黄褐色土の粒子・ブロックを含み堅い、３層は褐色土で炭化・焼土粒子や黄褐色土ブロックが混り非常に堅い、４層は褐色土で微砂質で炭化粒子も含みやや軟らかくなっている。堆積の状態は住居跡東側半分が１・２層が厚く堆積し、ほぼレンズ状に堆積している。

出土遺物は、北東側から東側の２～３層中にかけて多く出土している。土器は（第11図005)でＥＰ17の南側で床面直上より出土し、その付近から土偶の胸・胴・脚部片が出土してきる。石器は、石釘６・石錐１・石匙１・掻器１・磨製石　２・磨石２・凹石２・石刀１・石皿２・二次加工のある剥片２などが、３層中より出土している。

５・６号住居跡の重複関係は、土層の堆積および出土した遺物からみて、６号住居跡が廃棄・埋没が完了した後に5 号住居跡が構築され、新旧関係は６号住居跡より５号住居跡が新しい。

両住居跡の時期はいずれも縄文時代後期で、５号住居跡が宮戸II ａ式期で、６号住居跡は宮戸Ｉ ｂ式期の併行である。

(２)土　　坑

１号土坑　（第５図　図版３）

調査の南西側の傾斜地、17・18－59・60グリッド内に位置し、４号住居跡と重複している。４号住居跡の壁・床面を精査している際に検出された。遺存状態はほぼ良好である。

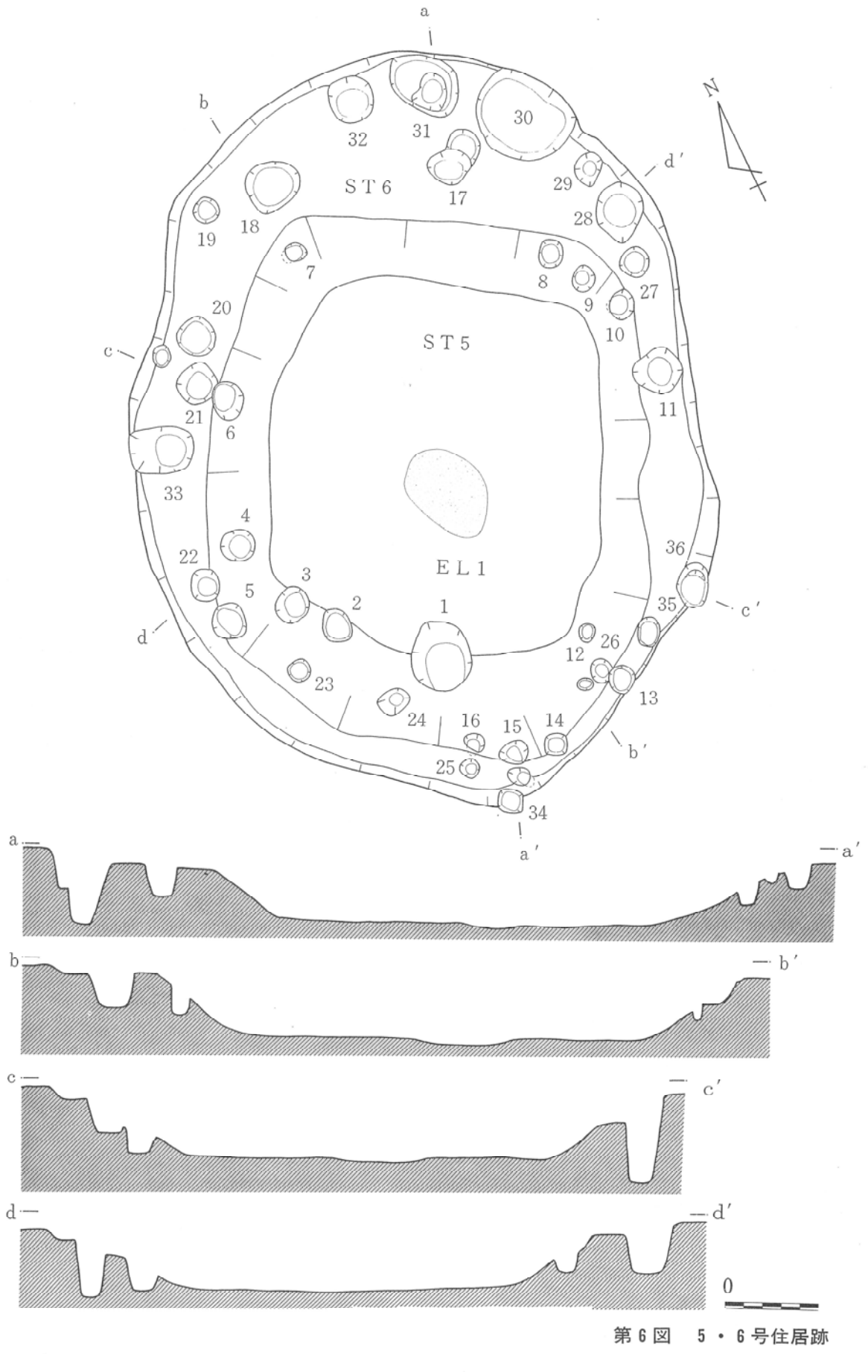
平面形は、やや東西に長くのびる不整楕円形を呈している。大きさは長軸92cm・短軸78cm・深さ約24cmで、やや傾斜をもって掘り込んでいる。坑底は中央部に凹凸がみられるがほぼ平坦である。覆土は３層に区分され、レンズ状に堆積している。出土遺物は土器片のみで７片出土している。時期は出土した土器片からみて縄文時代後期宮戸Ｉ ｂ式期の所産である。

２号土坑

調査区の南西側、14・15－51グリッドに在り、東側で２・３号住居跡と隣接している。平面形は、不整円形を呈し、大きさは長径102cm・短径98cm・深さ22cmで、ほぼ垂直に掘り込んでいる。時期は出土遺物がないが、土層からみて縄文時代後期と考えられる。

３号土坑

15－53・54グリッド内に位置し、２号土坑の南側～４ｍの所に在る。平面形は、不整円形を呈し、大きさは長径108cm・短径102cm・深さ31cmである。ほぼ垂直に掘り込んでいる。遺物は出土せず、時期は２号土坑同様で縄文時代後期と考えられる。


a
b
c
d
a′
b′
c′
d′
N
ST 6
ST 5
EL 1
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
0

第 6 図　5 ・ 6 号住居跡

2　遺　　物

（1）土器の分類

出土した遺物は、整理箱に約60箱を数え、土器は52箱である。その大半が住居跡の覆土より出土したものである。第Ⅰ群土器から第Ⅲ群土器に大別し、それぞれ縄文時代中期・後期・晩期とに分け、土器に描出された技法および文様別に類別化した。

a　土器の分類　（第７～10図　図版４～７）

第Ⅰ群土器　縄文時代中期中葉から末葉にかけての土器で、文様構成として渦巻・Ｓ字状・楕円文などが表出され、列点や器面全体を縄文を施すものなどがある。

a類（１・２・38・68～71）

地文を縄文として深鉢形の土器を示し、口縁部（38）から胴部（１・２・68）にかけて隆帯がみられ丁寧に研磨して渦巻文やＳ字状文が描き出され、胴下半部（70）からさらに研磨調整されて、楕円文などを表出している。胎土焼成もよく、器面全体も調整されている。

b類（　・21・40・43・51）

器形は深鉢形となり、口縁部は平縁となるものが多く（21・40）、胴中半部に土器の最大径を有する。地文を縄文として磨消の手法がみられ、楕円文主体とし文様を表出する。

C類（４・22・23・41・42・52・～58）

器形はほとんどが大形の深鉢形になり最大径が胴下半部に位置する。充塡縄文を主体として、Ｓ字状文を中心に文様を表出している。縄文の施文はＬＰが多い。

D類（72・73・74）

（72・73）は列点が施され、(72)では円文に区画された外側に、(73)は太い隆帯の上にそれぞれ施している。(74)は頸部付近から胴部にかけ刷目が施されている。

e類（５・24・44・59・60・75）

器面全体を縄文で施す粗製深鉢形土器である。（５）は口唇下に一本の水平沈線を描き、（59・60・75）は丁寧に口唇下を磨消している。（44）は口唇部が若干折返し口縁口唇直下から縄文を施している。その全てがＬＲの多条文である。

第Ⅱ群土器　縄文時代後期初頭から中葉の土器が中心で、平行沈線による曲線文様や文様帯が明確となり、磨消線文を主体とする。

a類（10・11・36・37・67・91・94）

１本ないし数本の沈線で曲線文様を描出し、沈線間を磨消す程度で器面全体は縄文帯が多く残っている。器形は深鉢形土器を呈するものが多く、口唇部がやや外反する（10）。

第7図　2・3号住居跡出土土器

1号住居跡出土（1～20）・3号住居跡出土（21～37）

頸部付近で数条の沈線を描き出し(49)、胴下半部で曲線的に真下している(36・37)。(11)は地文を撚糸とし口縁が大きく外反している。

b類　2～3条の沈線によって曲線文や区画文が描出され、磨消部分が広くなり縄文帯が紐状に表出されている。

b1類（6～9・12～13・19・25・27・28・30～34・48・49・61～65・76～82・87～89）

器形は、口唇部が外反もしくは内弯する深鉢形・鉢形土器を示し、沈線は口縁部から頸部にかけて2～3条平行または波状に横走し(6～8・49・76・78)、頸部付近には曲線的あるいは斜状に区画され(12～14・27・28・82・87・88)ており、胴上半部から中半部にかけて横走する2～3条の平行沈線で文様帯が区画されている(64)。(19・30・61～64)は前者に比較して沈線もやや細く鋭く施文しており、文様の描出は曲線的な区画より直線的に描いている。

b2類（9・15・17・18・29・31・66・81・89・93）

b1類と同様な文様構成や描出をしているが、沈線の直交する部分に円形の刺突を施すもの(31・66・89)や沈線との間に列点を施すもの(9・15・81・93)などがあり、矢羽状に施文しているもの(29)などがある。

b3類（85・86）

器形は深鉢形を呈し、口縁部が外傾している。1～2本の細い沈線で直線的に区画し、地文を器面全体に円形刺突文を施している。

c類　口縁部ないし頸部に1～3本の横走する沈線を施し、文様帯を区画している。

c1類（45・83・84）

器形は口縁部が大きく外反する鉢形土器である。(45)は口唇部に大きな突起がみられ波状口縁となり、口唇直下に2本の鋭い沈線が施され磨消部分の幅がせまく縄文帯が幅広となっている。(83・84)は器形は口縁部から頸部にかけて大きくアサガオ形に外反し、口縁部が丁寧に磨消され無文帯となっている。

c2類（35・90）

磨消される部分がせまくなり、文様は曲線的に大きく描出され、沈線も鋭く施され縁にはヘラ状工具先端で施された刺突文がみられる。

d類（46・47）

器形はゆるやかな波状口縁になる深鉢形土器である。文様の描出は口縁部から胴部にかけて表出され、横走する平行な沈線の間に連続する刻目文が施され、比較的間隔をおいて刺突されている。(46)は頸部から胴部にかけて入組文が加えられている。(47)は胴部破片である。

第8図　4・5・6号住居跡出土土器

4号住居跡出土(38～49)　5号住居跡出土(50～67)　6号住跡出土(68～71)

第 9 図　6 号住居跡・包含層出土土器

6 号住居跡出土(72～86)　包含層出土(87～109)

第10図　包含層出土土器・土製円盤

包含層出土(110～136)　土製円盤(01～06)

第Ⅲ群土器　縄文時代晩期初頭から中葉までの土器を一括した。

ａ類（95～101）

羊歯状文を描出している一群である。器形は口唇部が外反(95・98・100・101)あるいは内弯(98・99)し、小波状口縁を示す鉢形土器である。口唇部と頸部に連続する刻目を施し、２～３本の平行沈線に区画された口縁部の文様帯に羊歯状文を描出する。(96)は口唇から羊歯状文を施している。

ｂ類（102～129）

頸部付近に２～３本の平行沈線を主体とする一群である。器形は鉢形・浅鉢形・皿形・壺形となる。鉢形は口唇が外反(102・104～109・112)などで口縁が内弯しているものは、(103・110・114・115)であり、(103・110)は浅鉢形である。２～３本に区画された沈線の中にあるいは口唇部に、やや間隔のる刺突状の刻目を施している。(113～114)は２本の平行沈線が口唇直下にみられる。(116～127)は平行沈線で区画された器面下部に雲形文などが施されている。(128・129)は壺形の土器である。

ｃ類（130～136）

粗製深鉢形土器の一群で、器面全体に縄文を施している。

ｂ　土　製　品　（第10・13図　図版７）

土　　偶　（第13図１～４）

出土した土偶は12点で、完形品はみられない。(１)は顔部で目・鼻の部分は粘土紐を貼り付け隆起するように施し、頬の部分両側に６本の沈線がみられ、顔全体が前に突き出し、頭部と欠損している顎にアスファルトが付着している。(２)は表面と裏面に円形刺突文が施されている。(３)はＲＬの縄文が施文され表側は丁寧に磨消され、裏側は曲線文様部が磨消されている。(４)は妊娠女性を形どったもので、表・裏面とも肩部に多くの円形刺文が施され、腰部には沈線で山形文様を描出している。この他に顔部１・肩部３・脚部４が出土している。

耳　　栓　（第13図５・６）

(５・６)いずれも両側は窪んでおり、(６)は側面に弧を描くように沈線で施される。

土製円盤　（第10図01～06）

いずれもが不整円形を呈し、(04・06)は側辺を良く調整している。(01～03)の最大径は２～2.6cmで重さは0.7～1.2ｇで、(04～06)は最大径が４～5.5cmで重さ4.2～6.1ｇである。(05)は土器底部を利用し、その他は胴部破片である。

c　**完形土器**　（第11・12図　図版８・９）

第一群土器

縄文時代中期の土器を一括して述べる。

（第12図007　図版９－１）

胴部以下を欠く大形で、平縁の深鉢形土器である。器形は口縁部が内弯し、胴部以下は幾分ふくらみをもちながら底部へ達すると思われる。口径33.5cm、胴部現存径25cm、現高18.2cmを測る。文様構成は口縁部２～４cmを無文体とし、その下位には「の」字状の隆線を配する。その直下には低い隆線で円形に配され、「の」字状の隆線に連結する。更にその下や、側に逆「U」字を主要素とする磨消縄文が垂下する。「の」字状の隆線は６～８単位と推察される。逆「U」字状文は本来的には胴部文様帯に多くみられるが、口縁部文様帯にまで及んでいる。縄文はＬＲの単節斜行縄文である。胎土に小砂粒を多く含む。色調は暗黄褐色を呈し、焼成は良い方である。内面に横方向のミガキがみられる。

（第11図004　図版８－４）

胴部下半から底部を失うキャリパー形土器である。口径26cm、頸部20cm(くびれ部)、胴部現存径20cm、現高13.5cmを測る。文様構成は口縁部文様帯と、胴部文様帯とに分けられ、二者の文様帯は２本の沈線で区切られる。口縁部文様帯は、口縁部に下方に開く環状の隆線を４つ配し、更にこの隆線と隆線の間には、小さな隆線(小突起)が１単位づつ配される。これらの隆線下には凹文がある。沈線で区画された楕円文は、隆線と隆線の間の一単位づつ配される。胴部文様帯は、逆「U」字状文を単位文様として縦方向に転回し、12単位になると思われる。縄文はＬＲ単節斜縄文である。色調は暗黄褐色を呈する。胎土に砂粒を多く含む。焼成は良い方である。厚さ0.8cm。

（第11図003　図版８－３）

４単位の波状口縁をもつ小形のキャリパー形土器で、一部を欠損する。口径は波状口縁部で8.4cm、平縁部で9.2cm、頸部(くびれ部)6.3cm、器高は波状頂部7.4cm、底径40cmを測る。文様構成は「Z」字状文と、逆「U」字状文を単位文として施文するもので、前者は口縁部文様帯に4単位施文され、後者は胴部文様帯に縦方向に転回される。胎土は割合緻密で、焼成は良好である。色調は暗赤褐色を呈する。器壁の厚さは４～６cmである。内面は横方向にミガキがみられる。

（図版９－２）

胴部下半から底部にかけての残存する。深鉢形土器と考えられる。現存する胴径21.5cm、現高13cm、底径11.5cmを測る。底部近くまで斜縄文が施文される。縄文はＲＬ単節斜縄文である。器壁の厚さは1.0cm。器表面がかなり荒れているものの胎土は緻密である。焼

成は不良である。色調は暗黄褐色を呈する。内面に横方向のミガキがみられる。

第2群土器

縄文時代後期のものを一括して述べる。

（第11図001　図版８－１）

いわゆる袖珍土器と称される仲間と思われる。口径3.8cm、器高4.6cm、底径2.3cmを測る壺形の土器である。製作は手捏による。胴部と底部接点に小穴がみられ、径1.4cmを測る。文様は無く、かるい研磨がみられる。胎土に石英を多く含みキラキラ光る。焼成は良い。器壁の厚さは0.4cmである。色調は口縁部付近で暗黄褐色、胴部以下は灰褐色を呈する。

（第11図002　図版８－２）

001と同じ仲間で、口径1.6cm、器高3.5cm、底径3.8cmを測り、口縁部が窄まる小形土器である。体部にＲ無節斜縄文が施文される。胎土に白砂や石英砂を多く含みキラキラ光る。焼成は良好である。器壁の厚さは２～６cmで口縁部が薄い。色調は灰褐色を呈する。

（第11図005　図版８－５）

かるく「く」字状に外反する５つの波状口縁を特徴とし、胴部で若干ふくらみをもつ深鉢形土器である。口径11cm、頸部径10.3cm、胴部最大径10.6cm、器高11.2cm、底径5.0cmを測る。文様は頸部から胴部中程の間に横方向に展開する。頸部の１本の沈線によって、口縁部の無文帯と区画される。胴部は曲線を主とした沈線によって、文様が構成される。三角或いは四角形に区画された中を、磨消している。胴部下半は無文である。地文の縄文はＬＲ単節斜縄文で粗雑に施文されている。器壁の厚さは0.4cmで、色調は暗茶褐色を呈する。胎土・焼成ともに良い方である。

（第11図006　図版８－６）

口縁部と底部と欠損する壺形土器と考えられる。現存器高13.5cm、胴部上半に最大径があり14.3cmを測る。器壁の厚さは0.5cmである。地文に粗雑なＲＬ単節斜縄文が施文される。文様構成は沈線による直線と曲線の組み合せで、磨消手法を加えて構成される。胴部中程には、連孤文が一巡し、それ以下は斜縄文のみがみられる。胎土は良好であるが、焼成は良いとは言えない。器壁の厚さは0.4～0.6cmである。断面には約1.5cmおきに輪積痕がみられる。色調は黄褐色を呈する。

（第12図008　図版８－８）

口縁部がかるく「く」の字状に外反し、全体的にはアサガオ状に開く深鉢形土器である。口径32cm、頸部(くびれ部)24.4cm、器高32.5cm、底径10.5cmを測る。口縁部文様帯では沈線で区画された帯状の縄文が、２～３帯巡ると思われる。口縁部と胴部との間には無文帯で区切られ、胴部以下は斜縄文が底部近くまで施文される。原体の長さは２cm前後と考え

られ、ＲＬ単節斜縄文を右上から転している。底部近辺は良く研摩されている。胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好である。色調は暗褐色を呈する。内面は横方向にミガキがみられ、器壁の厚さは1.0cm前後である。

（図版９－３）

(008)と同じ器形をもつと考えられ、胴部下半と底部のみが残存する。現存胴部径17.8cm、現存器高11.5cm、底径10.5cmを測る。地文はＲＬ単節斜縄文である。胴部下半には２本以上の沈線が横走し一巡している。その中を磨消した後、研摩がゆきとどいている。底部付近３～４cm幅で無文様帯をなし、良く研摩がなされている。色調は暗黄褐色である。器壁の厚さは0.6cmである。胎土は緻密な方で、焼成も良好である。内面には縦方向のミガキがみられる。

（図版９－４）

（３）とほぼ同じ器形をもつと思われる。現存胴部径13.8cm、現存器高11.0cm、底径7.0cm、器表面は荒れておりザラザラする。底部外面に細かい網代の目圧痕がみられる。胴部中央に３本以上の沈線が横走し、（３）と同じように磨消されている。地文はＲＬ斜縄文と思われるが不明瞭である。胎土に砂粒を多く含み、焼成は不良である。器壁の厚さは0.6 cm前後である。色調は暗赤褐色を呈する。

（図版９－５）

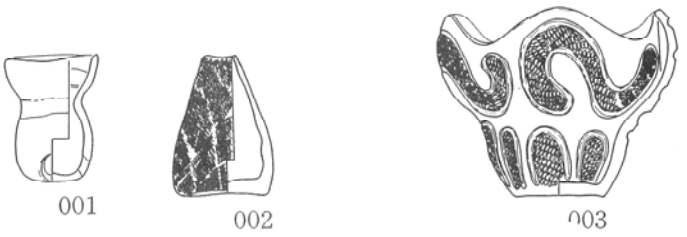
アサガオ状に開く深鉢形土器と考えられるが、胴部上半から口縁部を全く欠損する。現存胴径27.3cm、現存器高14.4cm、底径8.7cmを測る。内外面には丁寧な縦方向のミガキがみられる。胎土は緻密で、焼成も良好。器壁の厚さは0.5cmである。色調は暗茶褐色を呈する。

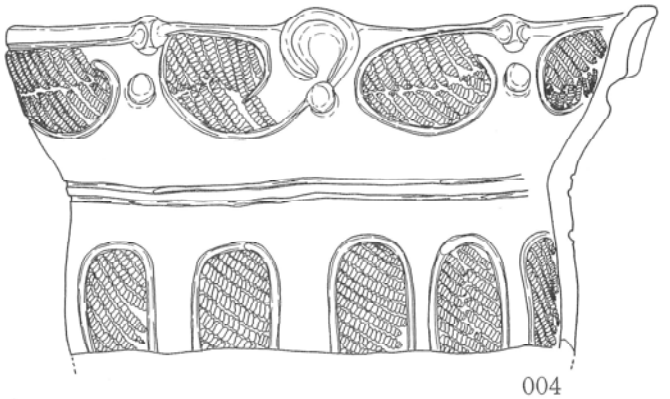
（図版９－６）

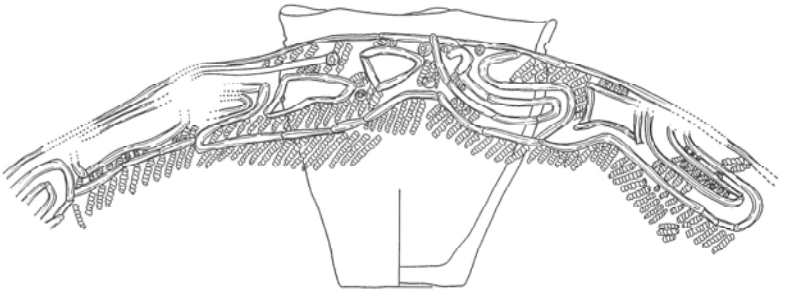
胴部にややふくらみをもつ深鉢形土器であるが、胴部上半から口縁部を欠損する。現存器高2.4cm、底径13.2cmを測る。底部外面には網代目の圧痕がみられるが、大部分が研磨されており、わずかに残っているにすぎない。底辺部約５cm幅で横方向にミガキがみられる。縄文はＲＬ単節斜縄文を施している。胎土は堅緻である。焼成は良好で、色調は暗黄褐色を呈する。内面は縦方向のミガキが著しい。

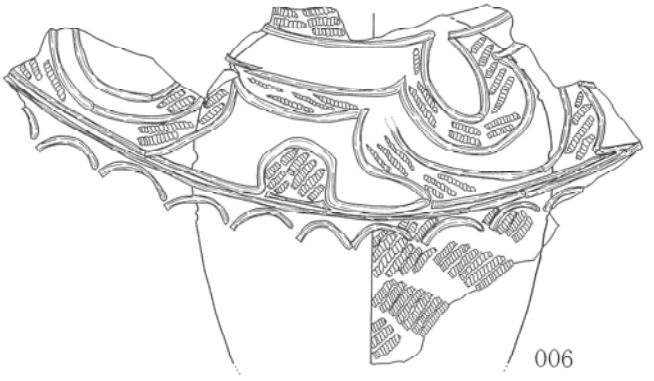
（図版８－７）

胴部がほぼ球形になる壺形土器と考えられ、胴部の一部と口縁部を失う。現存器高13.2cm、底径7.6cmを測る。胴部最大径は12.5cmを測る。胎土は良好で焼成も良い。胴部下半は、横方向にミガキがみられる。底部に木葉圧痕がある。地文にはＲＬ単節斜縄文が施文される。色調は黄褐色を呈する。器壁は0.6cmの厚さをもつ。





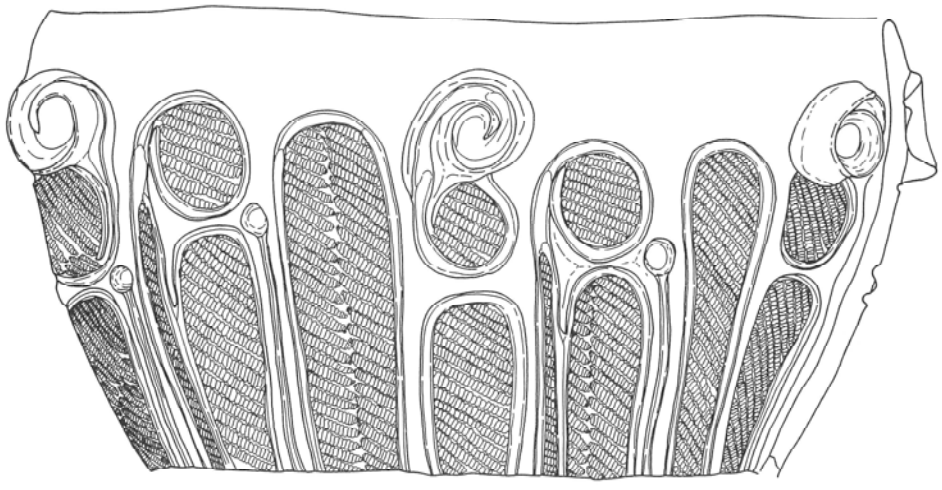


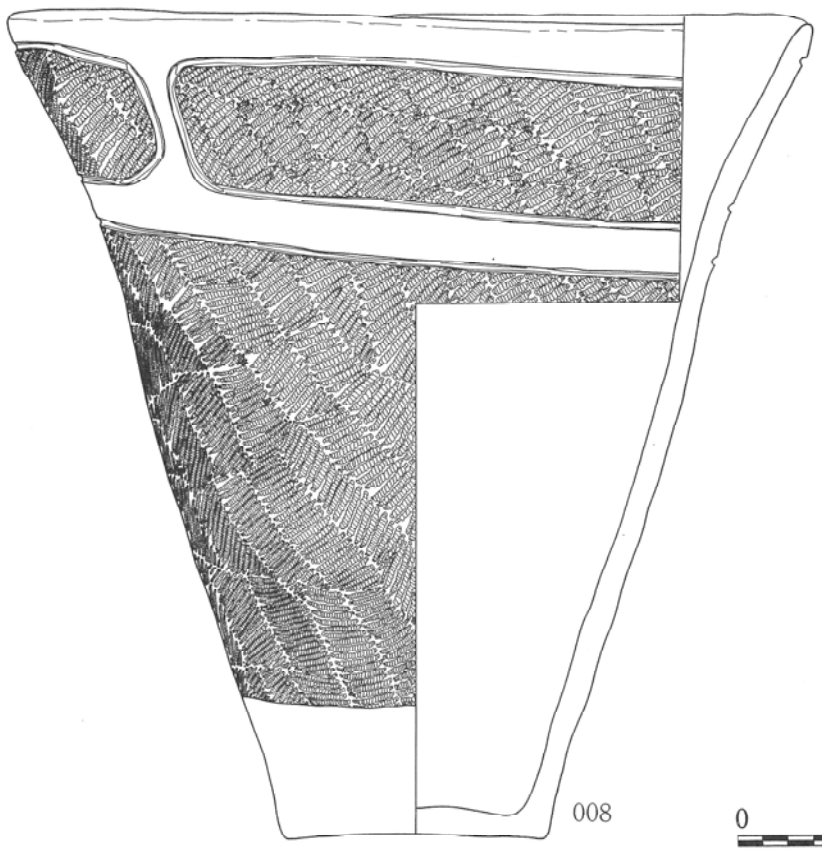


0 5 cm

第11図　完形土器実測図(１)

001・４号住居跡床面直上　002・５号住居跡覆土下層
003・５号住居跡覆土下層　004・３号住居跡覆土中
005・６号住居跡床面直上　006・17－11グリッドII層





第 12 図　完形土器実測図(2)

007・3 号住居跡覆土中　008・5 号住居跡覆土下層

第13図　土製品実測図　土偶・耳栓

1・3—46 G II 層　2・18—60 G II 層 3・5号住居跡床面直上
4・4—46 G II 層　5・5号住居跡床面直上　6・32—46 G II 層

(2)石器の分類

今回の調査では石器・剥片・砕片を合せると約920点出土した。石器の種類は石鏃・石錐・掻器・削器・篦状石器・石匙・有孔石製品・磨製石斧・打製石斧・磨石・凹石・石刀・石皿・石棒などで、打製石器の石質についてはほとんどが頁岩を素材とし、玉髄・チャート・黒鉄石・石英などもみられる。また磨製石器では砂岩・花崗岩・安山岩・礫岩・花崗閃緑岩・凝灰岩等である。本項においては、それらの代表的なものを抜き出して扱うこととする。

石　鏃（第14図１～15　図版10）

石鏃は全部で27点出土しており、うち完形品は約３分の２で、他は先端や脚部・茎部を欠損している。長さは大きいもので2.5cm、小さいもので1.6cmと約１cmの差があるが、幅においては、１cmから1.5cmである。石鏃の製作技術の点からみた場合、石器の中央部にまで、剥離が達しているものが大半を占めているため、その全貌については明らかにされないが、横長の剥片を素材としているものが数点みうけられる。また、15においては表裏両面にわたりえぐりの部分を中心に先端部付近まで三角形を呈するように、それぞれアスファルト状接着物の付着がみられる。従来、石鏃は棒状の先端に括り付けて用いられたように考えられていたが、本例が示すように、先端がわずかにのぞく程度まで石鏃を深く着装させていたと考えを改めなければなるまい。

石鏃を形態から分類すると次の二群に分けることができる。

ａ群　無茎石鏃（第14図１～４　図版10）

えぐりの深さに多少の差はみられるが、ほぼ二等辺三角形を呈するものである。

１は横長の剥片を素材としているため、縦断面において左側にふくらみをもち縁線が右側に寄っている。さらに４点に共通していることは、えぐりの部分が一番最後に剥離が施されているということである。

本群は大木９～10式期に盛行するものである。

ｂ群　有茎石鏃（第14図５～15　図版10）

茎を有するグループである。

７・８・10・16は茎と身の接するところが広く太く、縁辺も粗雑なつくりをしおり、菱形に近い形をしている。他は底辺が長く茎も細くなり、薄手のつくりとなる。

本群は後・晩期に盛行するものである。

石　錐（第14図16～22　図版10）

石錐は計７点出土しており、形態・機能の面から大きく二つに区分されている。ひとつ

は石器を直接手にもって使用するものでdrill、他はその石器に柄をつけて使用するものでawl である。石質はほとんどが頁岩でチャート・流紋岩がみられる。

a群　drill　（第14図19～22　図版10）

いわゆる手錐といわれているものである。20・21は基部まで丁寧に加工しているのに対し、19・22は素材の打面とバルブを残したままである。20は他者と比較すると先端が幅広となる。

b群　awl　（第14図16～18　図版10）

棒状を呈し細身の石器で素材の剥離面はほとんど残っていない。18は表裏面に擦痕がみられその面は剥離によって切られている。磨製石斧の破片を再利用したものと考えられる。

箆状石器　（第14図23　図版10）

3点出土しており、頁岩の縦長剥片を素材としている。23は背面に自然面を残しているものの両側縁から刃部にかけて入念な剥離が施されている。

掻　器　（第14図24・26・27　図版10）

剥片の先端に刃部を有するものである。24は縦断面の先端付近において、主要剥離面に湾曲がみられる。刃部は45度前後にフルーティングされ、いわゆるエンドスクレイパーである。27は横長の剥片を素材とし主要剥離面に向けて剥離を施し、刃部を作出しているところに本石器の特徴がみられる。3点出土している。

削　器　（第14図25・28　図版10）

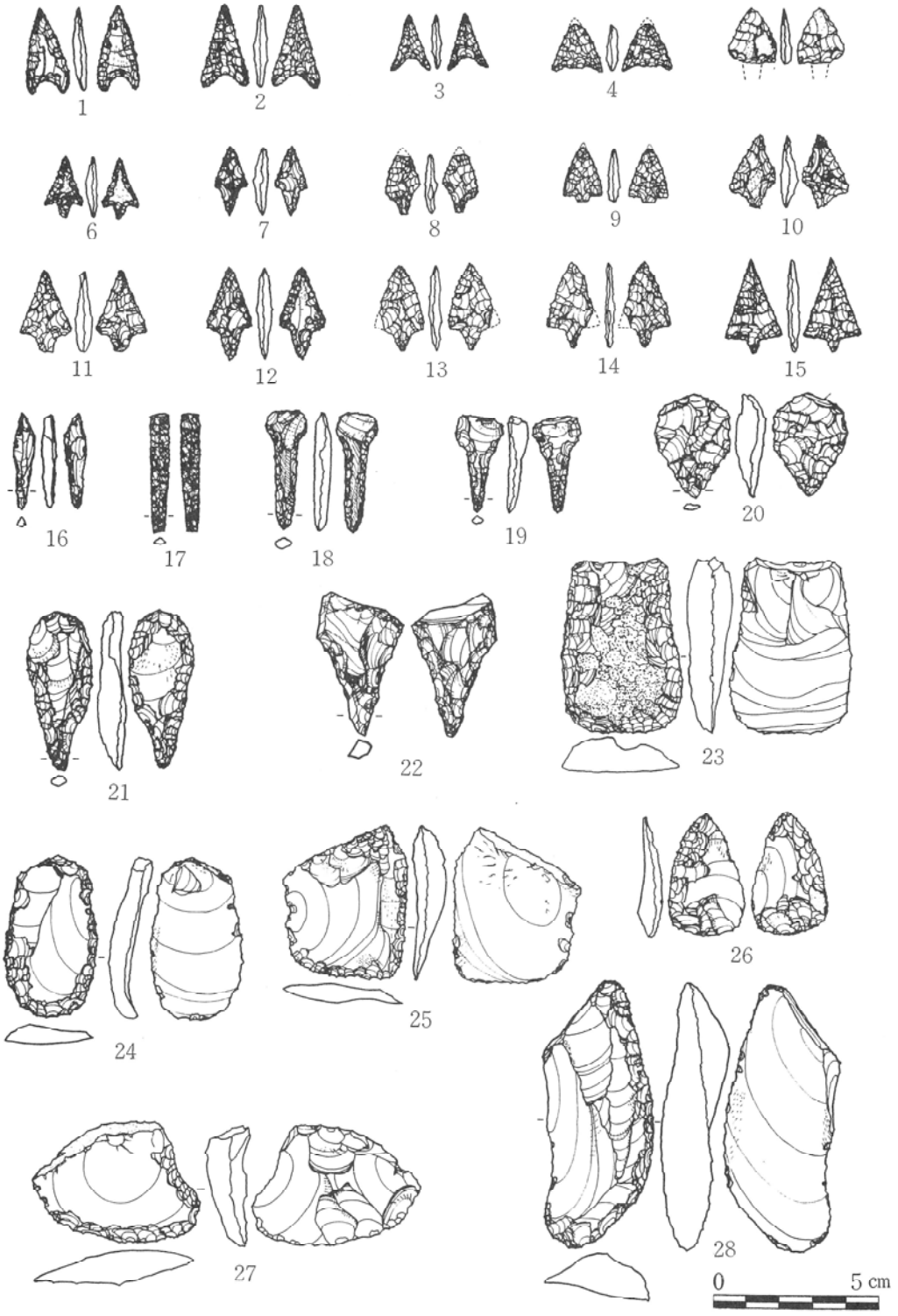
剥片の側辺に刃部を有するものである。25は右側縁から先端にかけてリタッチを施し、角度の薄い刃を作出しているが、28は刃部の位置は同様であるが、角度の大きい刃部を作出している。また背面における剥離痕の稜線が磨滅している。2点出土している。

石　匙　（第15図29～39　図版10）

刃部がつまみに対し平行するか、直行するかによって横形と縦形に分けられる。29・30は前者に属し、29は器全周に剥離が施されているが、30ではそれがみられず先端ににわずかな刃こぼれがあり、横形の範疇に入れた。31～39は縦形に属する。33・34はリタッチを施さず第一次剥離面をそのまま刃部としている。また、31はバルブを先端にもってきており36は二つのつまみ部を作出している。37はつまみを有さないが、機能的にみた場合、片方を刃部に他方を背として用いている。

有孔石製品　（第16図40・41　図版10）

40は3号住居跡より出土している。石質は軽石で横断面は長方形を呈するが、その四面とも擦って形を整えている。縦断面をみると表と裏で孔の位置が若干ずれていることから面両から穿孔されたと考えられる。44は5号住居跡より出土しており、やはり研摩され形



第 14 図　打製石器実測図(1)

が整えられている。本品は40に比べると軟質の軽石を用いており、加工が容易であったためであろう、表裏の孔の位置にずれはみられない。

磨製石斧（第16図42～48　図版10）

12点の出土がみられ、擦切りの製作技法をもちいているのが3点で、他は大形の礫又は石片を打ち欠き大体の形をつくりあげた後磨きをかけたものである。前者は破片しか検出されておらず、それらは磨かれ再利用されているものもあり、石錐の18もそれと考えられる。完形品は1点で他は基部と刃部のみであり、使用時に折れたものと考えられる。砂岩・緑泥片岩・閃緑岩・蛇文岩などの石質が用いられている。

磨　石（第16図49・50　図版10）

本遺跡からは19点出土しており、うち完形品は3点である。円形や楕円形を呈する河川石を用い、両面又は片面が研摩され曲面を呈している。普通、断面形は円形や楕円形を呈するが、49は「D」字形を呈し、凸面・平面とも研摩されている。石質は砂岩・花崗岩・安山岩などがみられる。

凹　石（第16・17図51～59　図版10）

27点出土し、円形・楕円形を呈する安山岩・花崗岩・砂岩・凝灰岩を用いている。凹部は単数なもの複数なものさまざまであり、また研摩されたもの、ざらざらしたものなどさまざまあり規則性はみられない。しかし、重さは約600ｇ前後であり片手で握れるぐらいの大きさということで共通性がみられる。磨かれた面もあることから磨石を転用して凹石に用いられたと考えられる。

打製石斧（17図61　図版10）

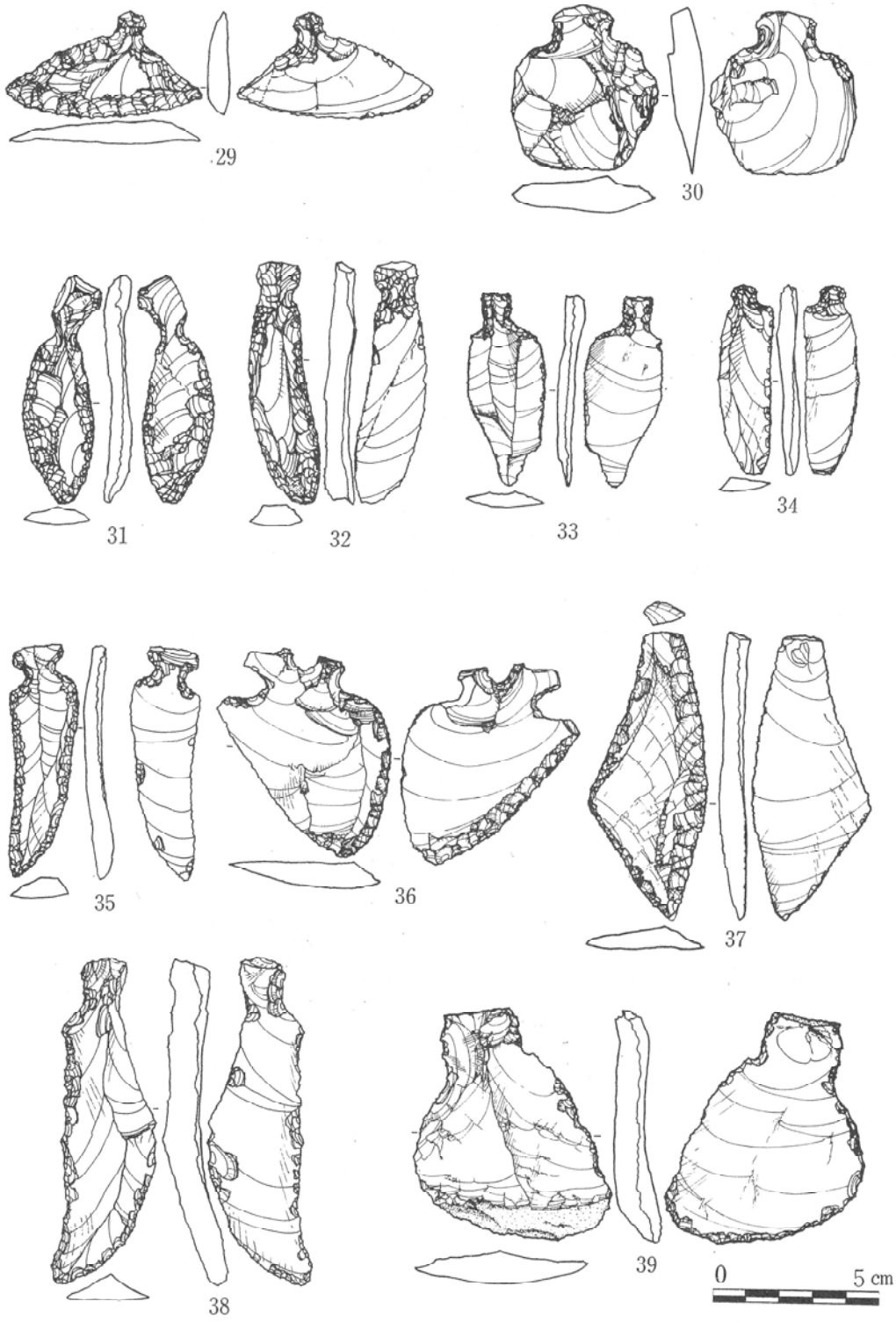
粘板岩を素材とした分銅形を呈する石器である。石の節理面を利用し、両側辺には階段状剥離を施し、形を整えている。表裏両面において器中央から刃部にかけて擦痕がみられるが、刃部ではそれと直行するが他は規則性がみられない。従って刃部のそれは使用痕、他は製作段階における研摩痕と考えられる。

石　刀（第17図62　図版10）

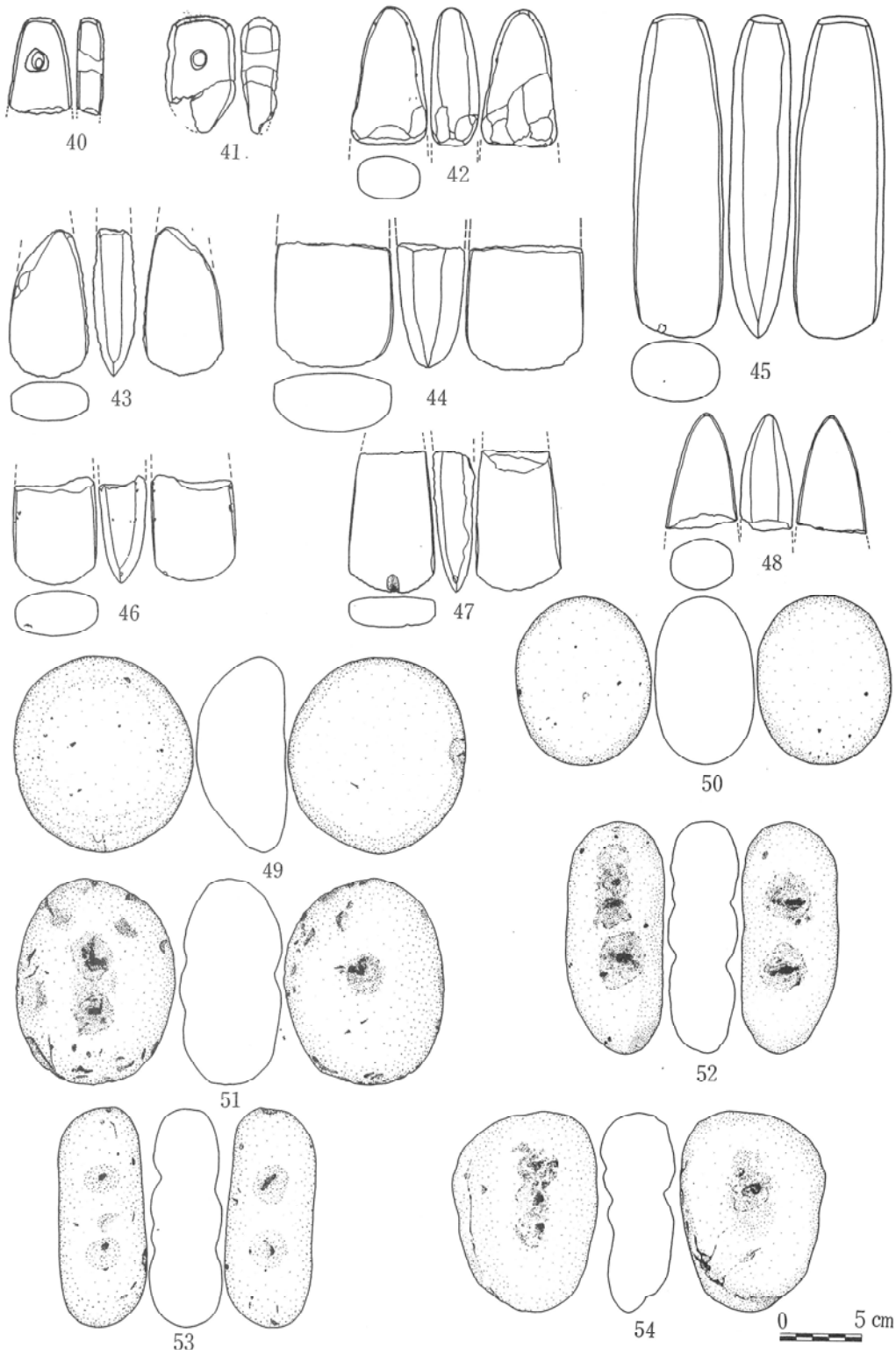
粘板岩を素材としている。打製石斧同様、石の節理面を利用し薄手の板状とした後に全周に剥離を施し、さらに研摩を行ない形状を整えている。

石　皿（第17図60・63　図版10）

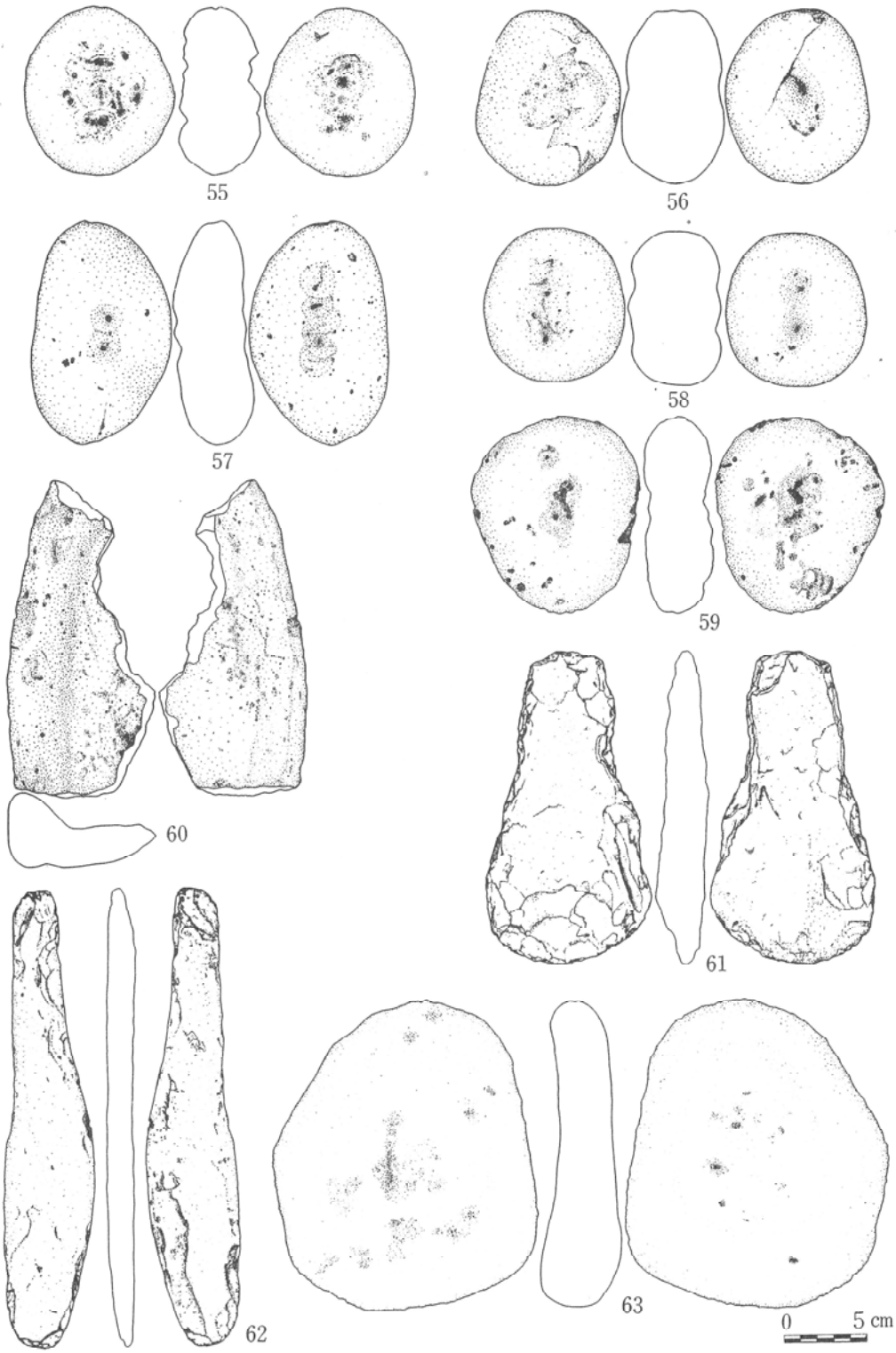
石皿は6点出土しており、完形品1点のみで他は破片であり、花崗岩・凝灰岩を用いている。63は不整円形で偏平な礫を用いており、凹面に若干の凸凹がみられることから表面部を高打により凹めた後に石皿として使用したものと考えられる。磨石の数からみると石皿の数は極めて少ない



第 15 図　打製石器実測図(2)



第 16 図　磨製石器実測図(1)



第17図　磨製石器実測図(2)

V　総　　括

1　遺構について

今回の調査は、調査区の南西側を主体に調査が進められ、北東域においては１号住居跡の縄文時代中期大木９ｂ式期の住居跡が検出され、調査区の中央部は出土遺物の分布や遺構などがみられず、南西側では縄文時代後期中葉の住居跡５軒・土拡３基が検出され、東側の段丘中段においては縄文時代晩期中葉の住居跡群が確認され、水上遺跡での時代・時期的な集落構成の推移がある程度解明された。このことは今後最上町を東西に流れる小国川流域での集落構成を考えるうえで一指針となり得たと思われる。

住居跡の構造については、２・３号住居跡の平面形は長楕円形を呈し、いずれも構造的には差異はみられず、住居跡中央部に３本の主柱穴を直線的に配置し、壁柱穴を主体に支柱穴としており、とくに２号住居跡のＥＰ６・19・９は場所的な領域を間仕切ったものと推定される。４号住居跡は、主柱穴が１本しか検出されていないが、おそらく４本主体とする構造と考えられ、支柱穴は壁際に寄っているのが特徴であり、南側に位置している４本の柱穴および張り出し部は出入口の施設と考えられる。５号住居跡は平面形が不整隅丸方形を示し、深く掘り込まれており主柱穴が壁際に位置している。６号住居跡は平面形が不整楕円形を呈し、主柱穴が住居跡の壁に位置している。このように、いずれの住居跡とも平面形や柱穴の配列をみると縄文時代後期の特徴が得られる。

住居跡の形態的推移については、水上遺跡の場合に限ってみると２・３号住居跡の長楕円形、６号住居跡の不整楕円形、５号住居跡の不整隅丸方形、４号住居跡の隅丸方形となり、長楕円→不整楕円形→不整隅丸方形→隅丸方形となる形態的な変化を示し、住居跡の構造や規模が縮少されていく傾向にある。

2　遺物について

（１）　分類した土器の時期

第Ｉ群土器　縄文時代中期中葉から末葉にかけての時代である。

ａ類　Ｓ字状文や渦巻文の文様を主体として、隆体が調整・研磨されており、（第11・12図004・007）などが含まれ、大木９ａ式に比定される。

ｂ・ｄ・ｅ類　文様構成は楕円文を描出し、磨消がみられる。（第11図003・図版９－２）などが含まれる。

大木９ｂ式に比定される。

c類　文様はS字状文を中心に描出され、充填縄文がみられる。深鉢形土器で最大径が胴下半部に位置するのが特徴である。大木10a式に比定される。

第II群土器　縄文時代後期初頭から中葉にかけての一群である。

a類　1本ないし数本の沈線で曲線的な文様を描き、沈線の間にある程度磨消を施しており、文様が胴下半部までたっしている。宮戸Ⅰa式に比定される。

b類　太い2～3本の沈線によって曲線文や区画文が描出され、磨消部分が広くなり縄帯が紐状に表出している。文様構成は胴中半部まで描かれている。(第11図005)なども含まれる。宮戸Ⅰb式に比定される。

c類　口縁部ないし頸部に1～3本の横走する沈線を施し、文様帯を区画する。(第11・12図002・008・図版9－3・4・5)なども含まれる。宮戸IIa式に比定される。

d類　横走する平行な沈線の間に連続する刻目文が施されている。(第11図002・006・図版8－9)なども含まれる。宮戸IIIb式に比定される。

第III群土器　縄文時代晩期初頭から中葉までの一群である。

a類　羊歯状文を描出しているグループである。大洞BC式に比定される。

b類　頸部付近に2～3本の平行沈線を施し、雲形文などが描出されている。大洞C_2式に比定される。

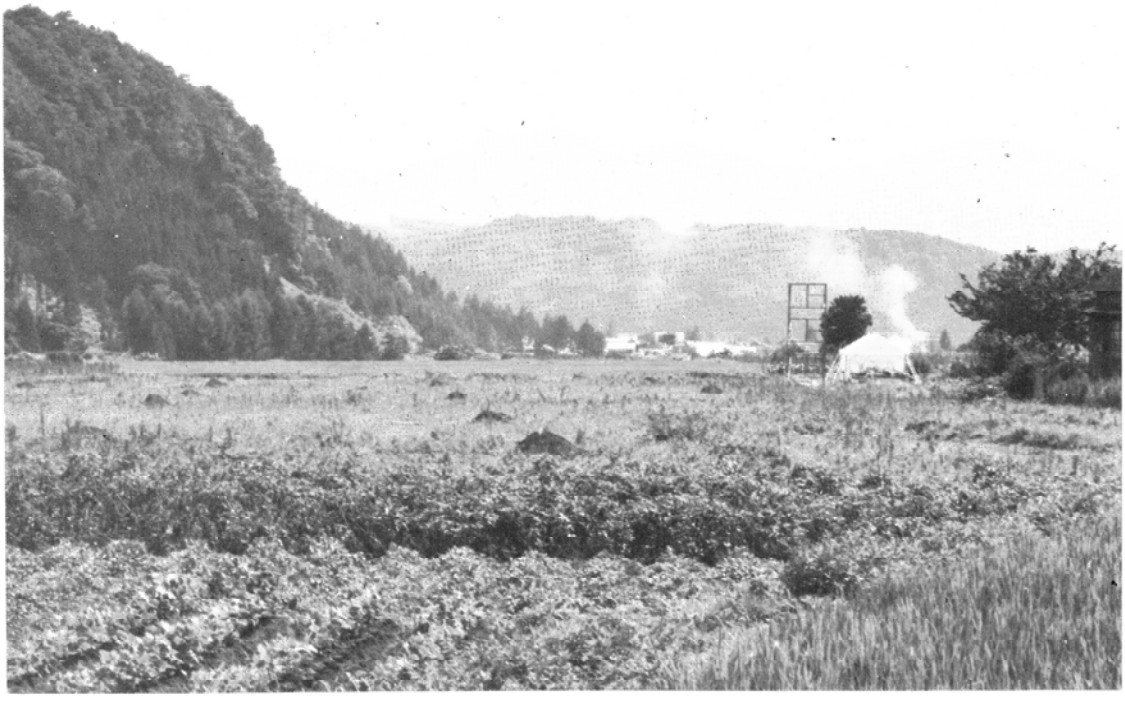
(2)石器について

今回の調査で出土した石器は約920点出土しおり、利器として使用された石鏃27・石錐11・石匙14・掻器3・削器2・篦状石器3・二次加のある剥片25・打製石斧1・磨製石斧12・凹石27・磨石19・石皿6・石棒3・石刀1・有孔石製品2など出土し、その大半が調査区の南西側と東側の区域に分布している。

石鏃は、形態的な変化を観察すると、(第14図1～3)は縄文時代中期中葉から末葉にかけみられる無茎石鏃で、とくに有茎石鏃の変化は、(第14図7・10・12)で縄文時代後期の古い段階に位置づけられるもので、新しくなるにつれ二等辺三角形状となる。(第14図11・13～15)。石匙については、縄文時代後・晩期になると肩部が定角的に張り(第14図30・33・34)、(38)はとくに顕著であり、つまみ部の抉りも深くなるようである(35)。その他の、打製石器は縄文時代中期や後期にみられ出土している。打製石斧(第10図61)は縄文時代後期の特徴を示す分銅形である。また、他遺跡と比較して凹石の量的割合いが多いことは特徴となる。

図　　版

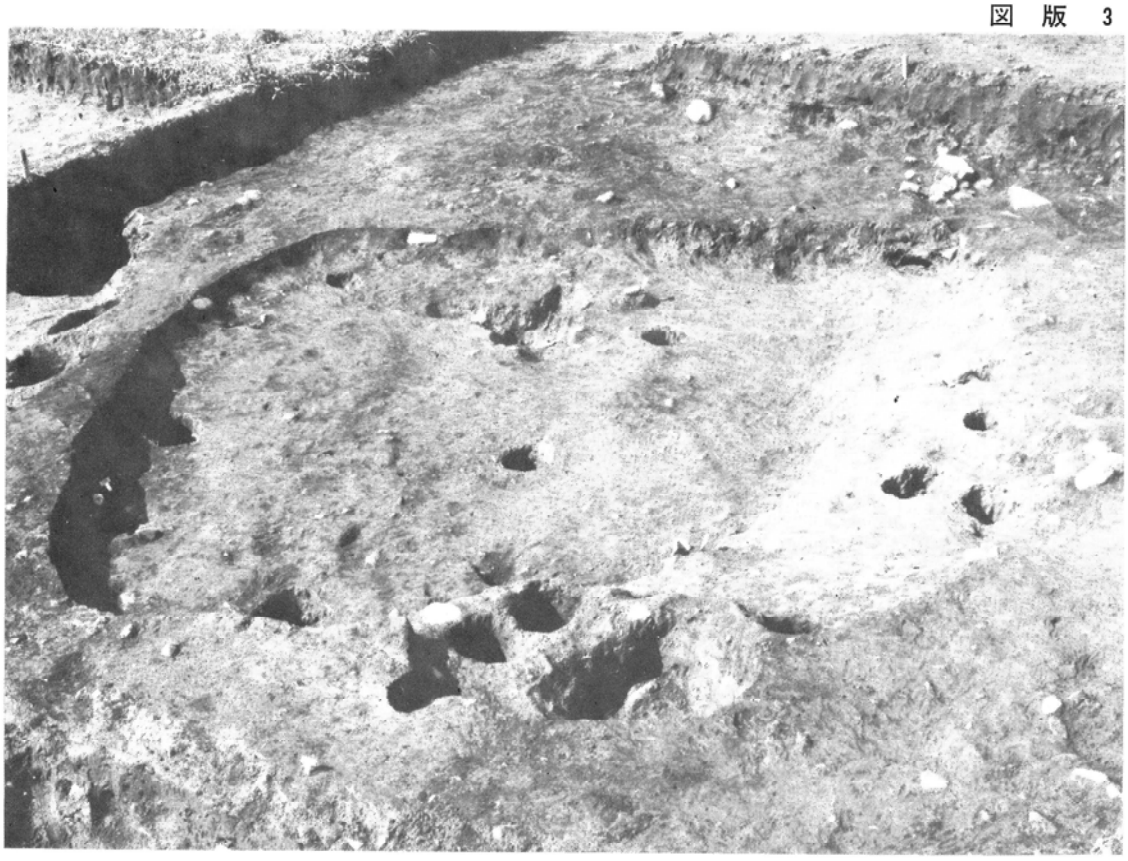
水上遺跡遠景(南から望む)



水上遺跡近景(北から望む)

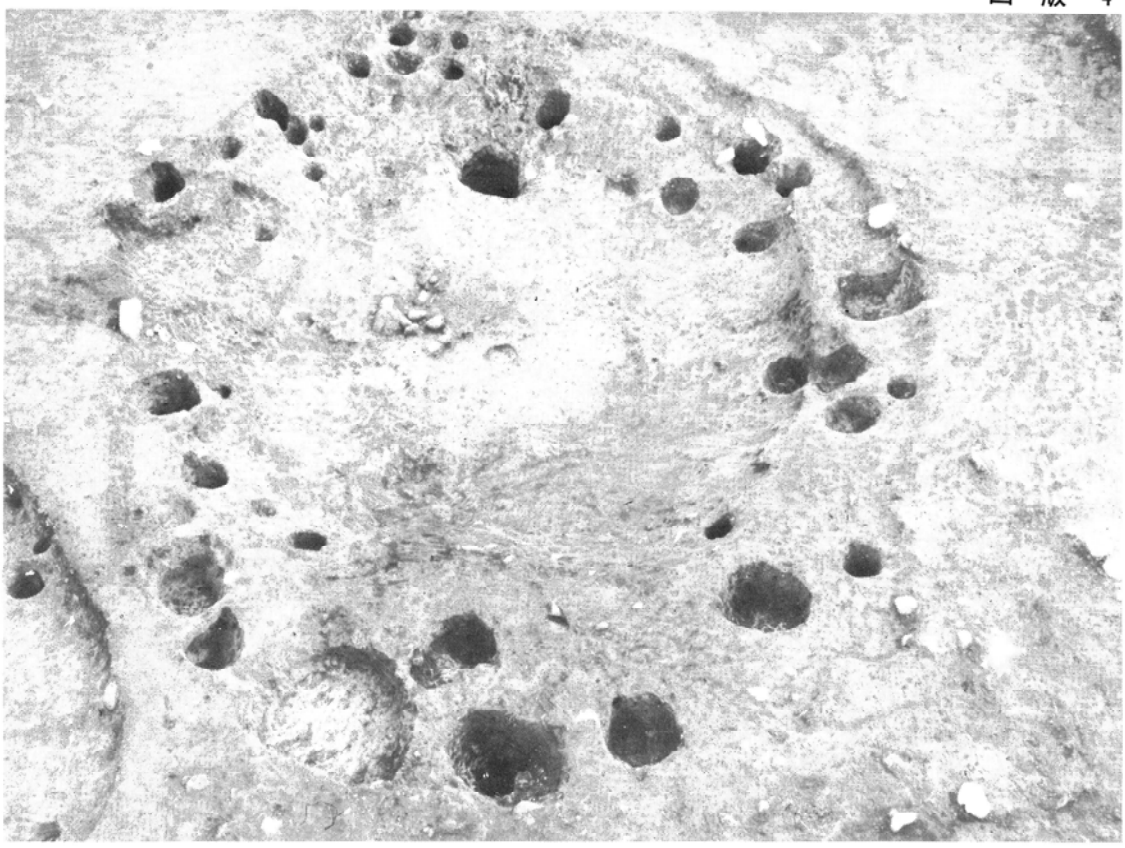
2・3号住居跡全景

発掘風景 1

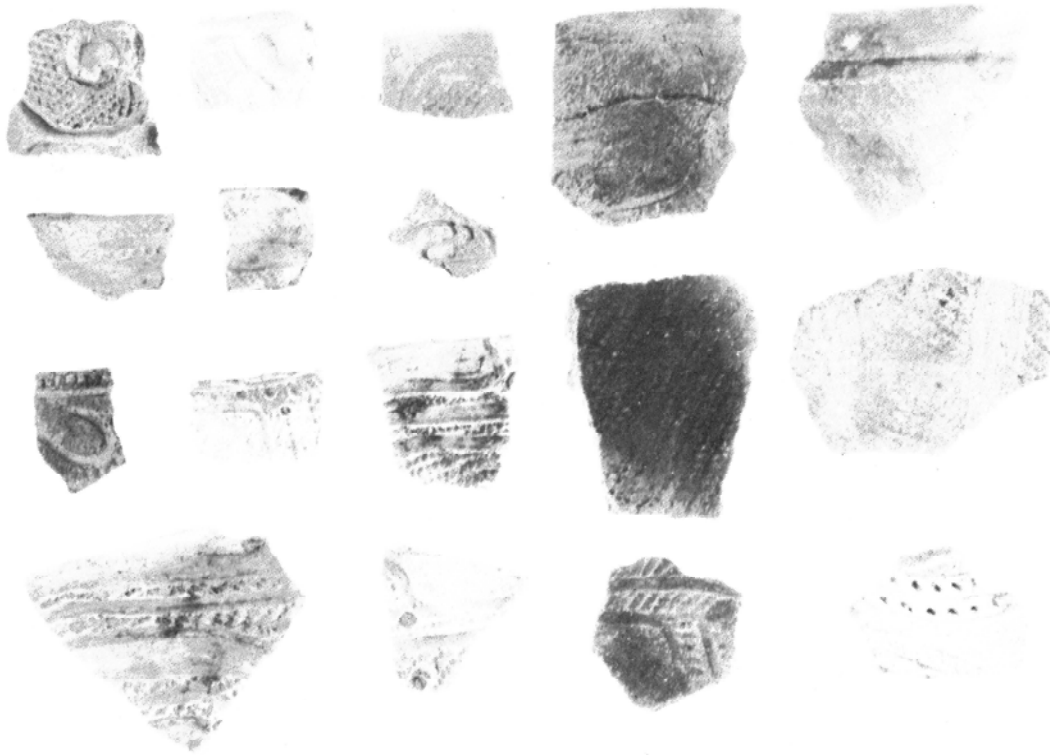


4 号住居跡全景

1 号土拡全景

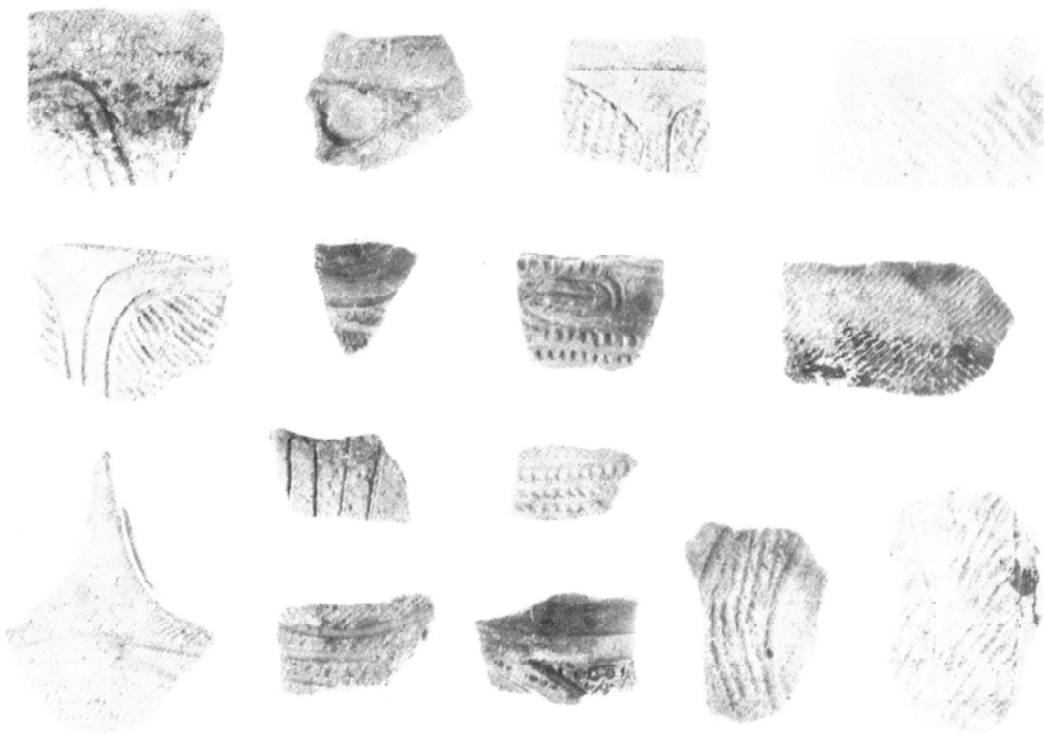


5・6号住居跡全景

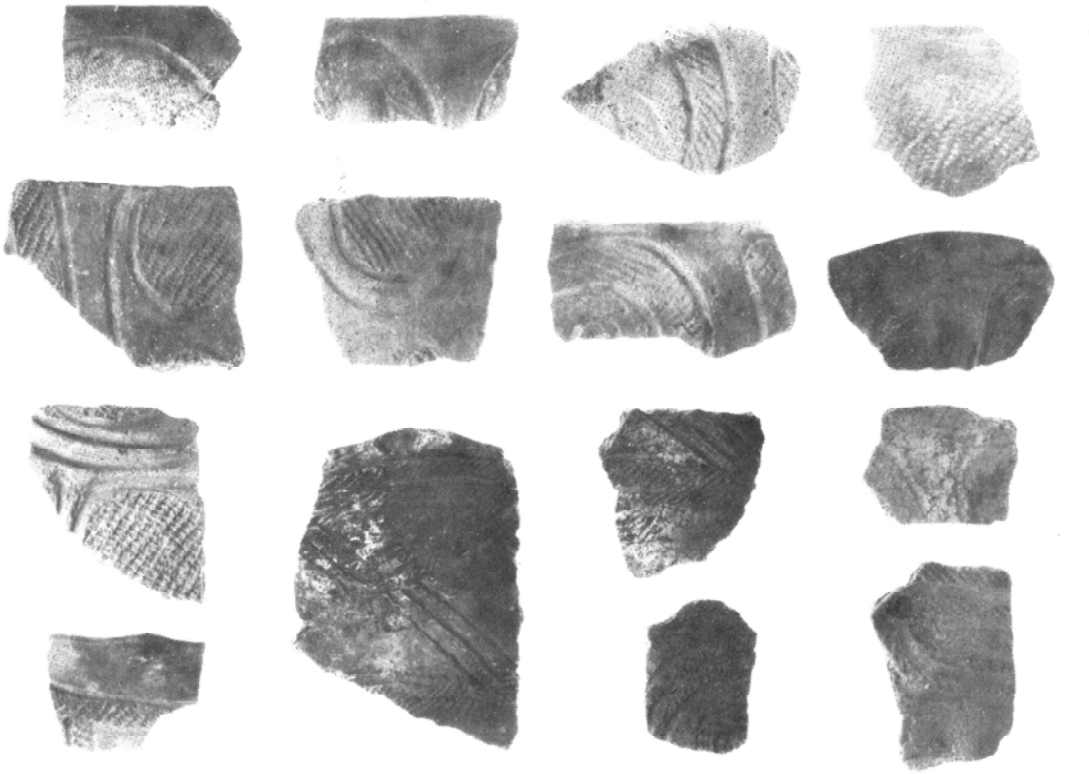


2号住居跡出土土器

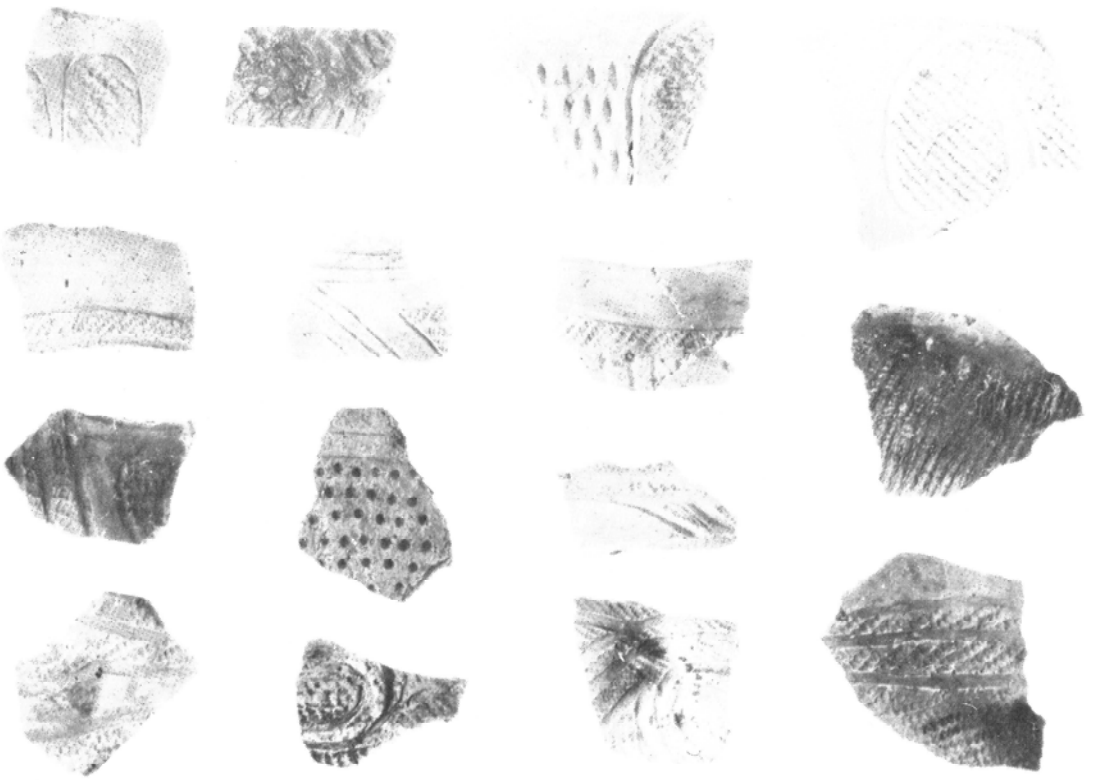
3 号住居跡出土土器



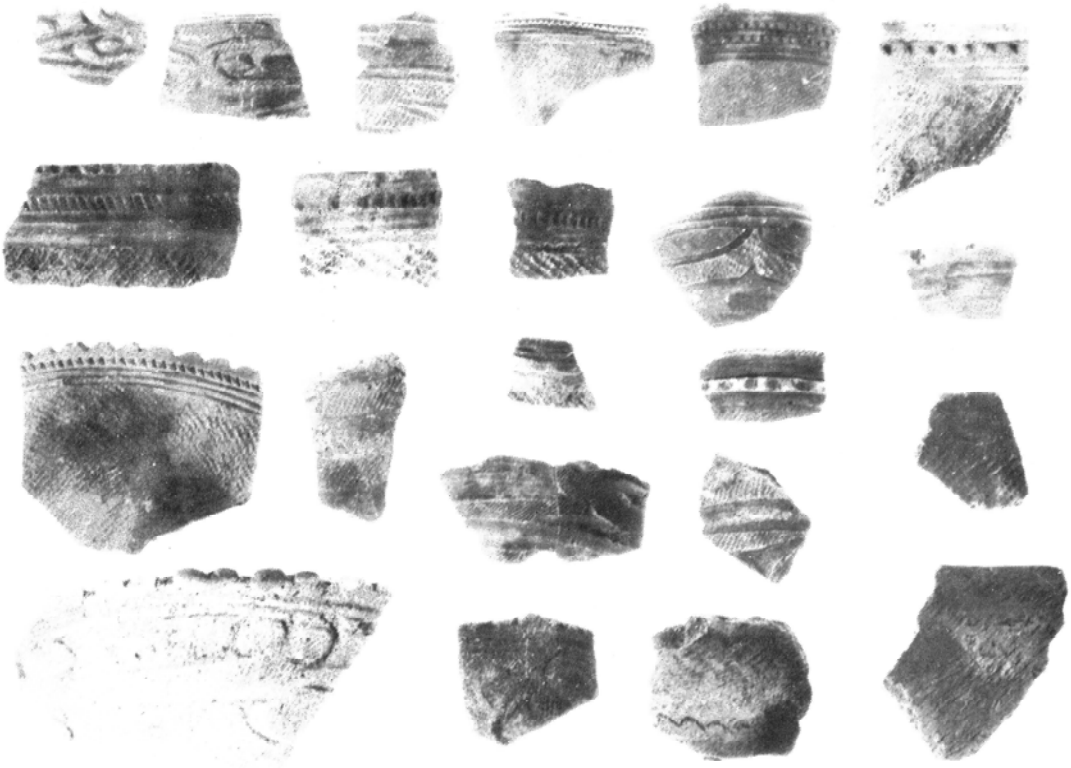
4 号住居跡出土土器



5号住居跡出土土器



6号住居跡出土土器



包含層出土土器

土　製　品

1

2

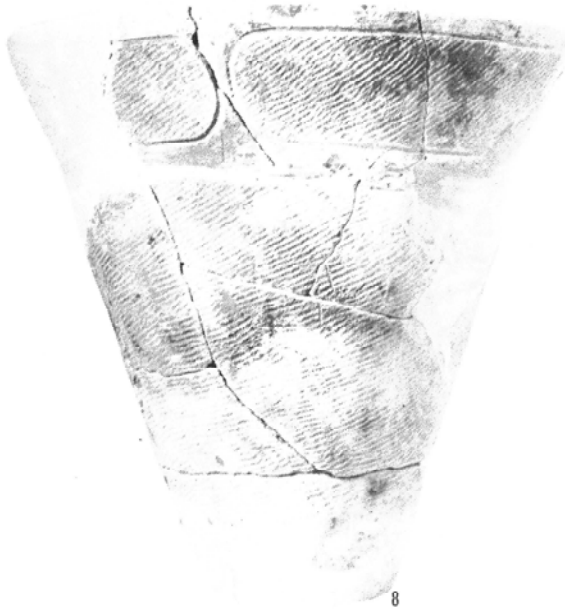
3

4

5

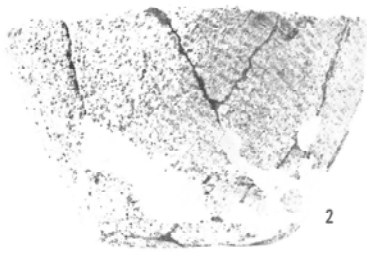
6

7

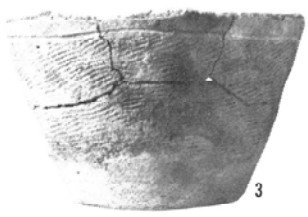


8

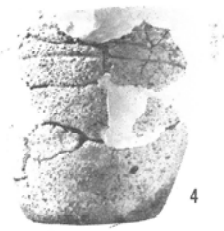
1



2



3

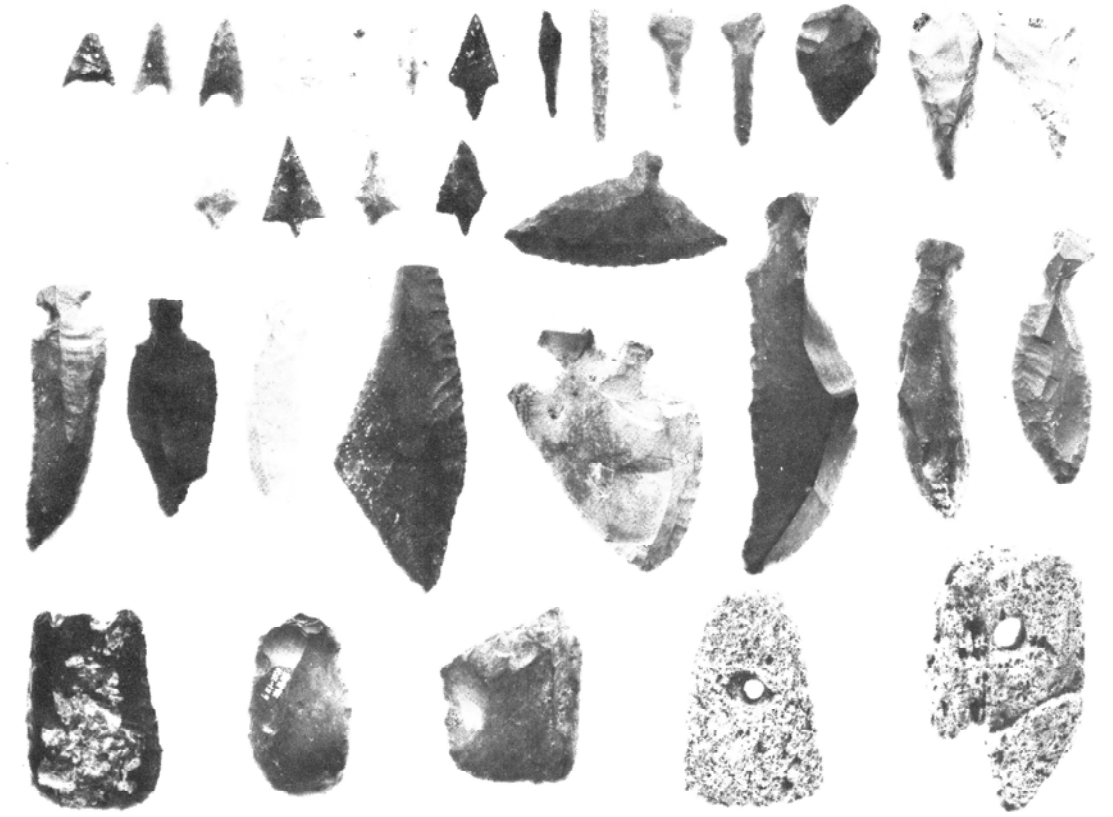


4

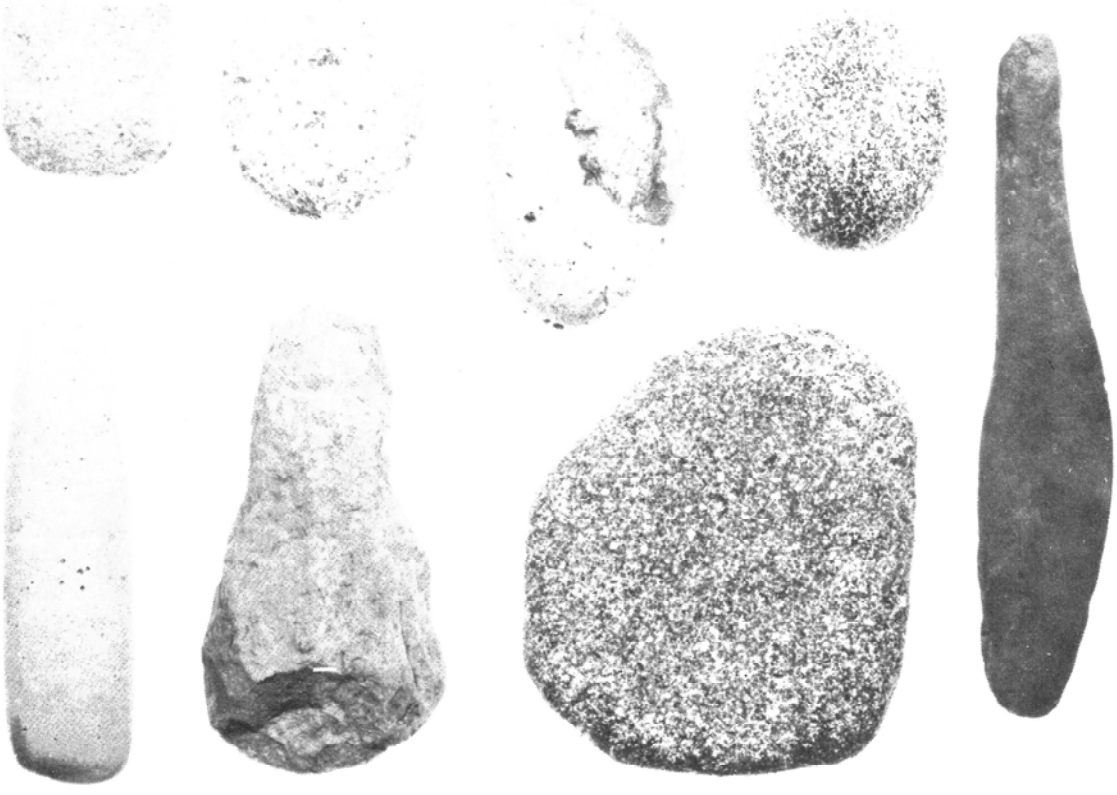
5

6

完形土器(2)



打製石器



磨製石器

山形県埋蔵文化財調査報告書第27集

水上（みずかみ）遺跡

発掘調査報告書

昭和55年３月29日　印刷
昭和55年３月31日　発行

発行　山形県教育委員会
印刷　㈱大風印刷